



〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

平成二十一年度 十全同窓会総会開催

去る七月四日(土) 医学部記念館において、平成二十一年度十全同窓会総会が同窓会員五十四名の出席のもとに開催された。宝町地区事務部池森順一総務課長の開会の辞に続いて佐藤保会長を議長に選出し、物故会員八十四名に黙祷を捧げた後議事に入った。

まず、古川俣理事長から平成二十年度(平成二十年一月～十二月)の会務報告が行われ、(一)平成二十年春の卒業生一〇一名全員が会員になったこと、(二)理事会審議内容報告、(三)平成二十年度総会報告、(四)支部総会(十支部)開催状況、(五)同窓会会報発行状況、(六)同窓会会員数などが報告された。

次いで、中沼安二研究科長・医学系長より、(一)新任・退職・退任教授人事、(二)韓国蔚山(ウルサン)大学医学部との交流協定締結、(三)キンストレーキの修理を国宝修理所に依頼したことが報告された。また、臼井澄先生(昭和

三十九年卒業)のご篤志によって設けられた高安賞の第七回受賞者として、腫瘍統御学(分子生体応答) 呉俣先生に最優秀論文賞、がん遺伝子治療学(内科学第一) 宇野将文先生、高島伸一郎先生に優秀論文賞が授与された。

引き続き、中沼安二研究科長・医学系長(金子周一医学部長・医学部長代理)より、(一)第一〇三回医師国家試験(平成二十一年三月実施)の合格率、(二)平成二十一年三月卒業生の進路、(三)平成二十一年度医学類入学者数、(四)医学展の開催などが報告された。

続いて、遠路参加された六支部の支部長・支部幹事より各支部の近況が報告された。

次に議案の審議に入り、平成二十年度決算報告と監査報告が行われた。同窓会基金の名称について確認と意見交換の後、決算報告が了承された。平成二十一年度予算案について、名簿作成予算の記

載方法について意見交換の後、予算案が承認され、役員改選も了承された。その他として、

(一) 古川俣理事長から、本年十二月の刊行を予定している同窓会員名簿改訂作業の進行状況が報告された。(二) 中沼安二研究科長・医学系長(金子周一医学部長・医学部長代理)から、金沢大学医学部百五十周年記念事業準備状況、ならびに金沢大学創基百五十周年記念事業の内容が報告された。最後に、課外活動団体として西医体、白山診療班、立山診療班、ACLS金沢、医学展実行委員会の各代表に、佐藤保会長から支援金が贈呈され、総会議事を終えた。



総会に続き、佐藤保会長と小森貴副会長の司会のもと、分子遺伝学(生化学二)村松正道教授「デアミナーゼとゲノム高頻度変異」、血液情報統御学(臨床検査医学)和田隆志教授「臨床検査医学の新たな展開にむけて」、分子神経科学・統合生理学(生理学二)櫻井武教授「新規生理活性ペプチドの探索と機能解析」と題して教授就任講演が行われた。

講演会終了後、懇親会が催された。丹尾太福井支部長の発声による乾杯の後和やかに交歓の会が進行し、大浦孝沖繩支部長の中締めで盛会裡に散会した。

(山本 健 記)

目次

総会開催	1
教授就任挨拶	2
総会記事	2
総会講演抄録	5
名誉教授追悼文	8
創立百五十周年誌編集へのお願い	11
百五十周年記念事業趣意書	12
受賞	13
学会報告	15
関連病院長会議	16
御遺骨返還式・合同慰霊祭	16
オーブンキャンパス	17
十全学術行脚 第十六回	18
病院紹介	20
教室だより	22
支部だより	24
クラス会	26
医師会コーナー	27
医学部百五十周年史のための覚え書【26】	28
学生コーナー	29
ホームカミングデイ	30
編集後記	30

教授就任挨拶

三輪 高喜博士

(昭和六十三年院修了)

金沢医科大学感覚機能病態学教授に就任



この度、平成二十一年五月十八日付で金沢医科大学感覚機能病態学(耳鼻咽喉科学)の部門教授を拝命いたしました。私は、昭和五十八年に富山医科薬科大学を卒業

し、梅田良三教授の主宰する金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室に入局し、平成元年に金沢大学大学院を修了しました。大学院では嗅覚の変性と再生に関する研究を行い、平成二年、古川侃教授(現金沢大学理事)の就任とともに助手、講師、助(准)教授として歩みをともし、嗅覚外来を担当するとともに、嗅覚の基礎研究も行ってきました。

新医師臨床研修制度の発足とともに、大学医学部を取巻く環境は厳しいものになっており、それは当教室も例外ではありません。この事態の解決は決して容易

とはいえませんが、幸い、金沢大学ならびにその関連病院、さらには地域で開業されている先生方とは既に深い連携が築かれており、この繋がりが強力な武器になるものと信じております。

金沢医科大学の建学の精神の一つである、「良医を育てる」が示しますように、「この教室あるいはこの大学に入って良かった」と思える医師を一人でも多く育てたいと思っています。なにとぞ、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

総会記事

平成二十年度決算報告ならびに平成二十一年度予算について

平成二十年度決算

表一に一般会計の決算書を示します。住所不明者の増加等により会費収入の見込みを大幅に下回り、約一五〇万円の収入減となりました。雑収入に関しては、DVDの頒布にかかる分配金が予算を上回りました。

支出では、事業費が少々減額となりました。会報の頁数が少なくなったこと、会報発送代が宅配便採用で減少したことなどがその理由です。なお、学生課外活

動費は医学展の補助も含んでおります。全体として、会費収入が減少しましたが、支出の節約等で、例年を上回る三百万円を基金へ繰り込むことが出来ました。

付随する特別会計にほとんど動きがありません。以上の決算報告に対して、監査理事から会計監査報告がなされ承認されました(表二、五を参照)。

平成二十一年度予算

表六をご覧ください。会費収入に関し

まして、十全同窓会会員名簿の発行を予定しており、これに伴う収入増加を見込んでおります。金沢医科大学時代のDVDが今なお好評で購入希望があるため、雑収入を期待しております。十全同窓会基金からの二百万円は、新金沢大学附属病院完成記念行事の補助として計上しました。

支出では、前年度並(二十年度予算)としました。今年度も医学展を開催するので、その予算を組みました。

百五十周年記念事業としては、記念施設整備、記念式典の開催、記念誌の発行、募金活動を中心に準備しております。

(会計担当 中沼 安二 記)

名簿発送のお知らせと会費納入のお願い

十全同窓会名簿は本年十二月初旬頃の刊行を予定しております。

名簿は平成二十年度、二十一年度会費納入の方にのみ発送致します。

未納の方は至急お納めください。

免除会員の先生方へのお願い

本年度の名簿改訂事業は、従来協賛を頂いていた企業(製薬・医科器械・出版社他)の広告収入の減を受けて経済的に苦しい状況にあります。

誠に恐縮ではございますが、今回は一部五、〇〇〇円でご購入をお願い申し上げます。名簿発送時にお振込用紙を同封させていただきますので、ご理解とご協力を賜われますようよろしくお願い申し上げます。

(表1) 平成20年度決算書

自 平成20年 1月 1日
至 平成20年12月31日

収 入				支 出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	4,867,521	4,867,521		事 業 費	5,971,122	5,751,096	会報印刷製本代 2,629,567
会 費 収 入	13,000,000	11,234,000	平成 20 年度会費 4,000 円 × 1,626 人 6,504,000				会報発送代 1,623,480
			過年度分 3,802,000				アカンサス印刷代 23,632
			平成 21 年度以降会費 432,000				アカンサス発送代 15,145
			準会員会費 6,000 円 × 80 人 480,000				関連病院長会議・関連病院渉外費
			4,000 円 × 4 人 16,000				卒前研修支援 (SP 研修会支援) 200,000
雑 収 入	188,480	274,051	預金利息 4,233				学生課外活動支援
			H19 年 SP 研修会 支援金からの返金 109,186				(西医体) 300,000
			DVD 頒布に係る分配金 (KUTLO より) 18 部 160,632				(立山診療班) 100,000
							(白山診療班) 100,000
				旅 費	1,100,000	761,440	会費払込用紙印刷代 24,150
							新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 279,972
							金沢近代医学史跡図印刷製本 (3,000 枚) 255,150
							各支部総会への出張費 416,800
				会 議 費	330,000	267,467	各県支部長総会招待旅費 315,960
				会 慶 弔 費	100,000	77,960	理事会出席・監査の為に来学旅費 28,680
							総会、理事会、編集委員会 267,467
							弔電 (12 件) 6,960
				補 助 費	642,600	442,042	御香典 (3 件) 50,000
							生花一对 (1 件) 21,000
							記念館展示室整備 0
							図書館医学部分館整備補助 299,442
							学生課外活動補助 (ACLS) 42,600
							医学展補助 100,000
				事 務 費	2,736,000	2,646,912	会費払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、 通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 466,912
							人件費 2,180,000
				雑 費	60,000	60,000	会報袋詰め作業代 60,000
				支部への補助費	500,000	410,000	11 件 410,000
				基金への繰込み	3,000,000	3,000,000	十全同窓会基金口座へ 3,000,000
				予 備 費	3,616,279	1,126,595	事務職員退職慰労金 130,000
							「大学院医学系研究科進学」説明会補助金 20,000
							事務局デスクトップパソコン一式、その他 976,595
計	¥18,056,001	¥16,375,572		繰 越 金		1,832,060	
				計	¥18,056,001	¥16,375,572	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成20年 1月 1日
至 平成20年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	135,414,565				
繰 入 金	3,000,000	一般会計(十全同窓会普通預金)から	—	0	
利 息	3,374 427,084	北國銀行普通預金利息 北國銀行定期預金利息			
計	138,845,023		計	0	残高 ¥138,845,023

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成20年 1月 1日
至 平成20年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
繰 越 金	2,532,120		—	0	
利 息	4,043	普通預金利息			
計	2,536,163		計	0	残高 ¥2,536,163

(表4) 高柳奨学会会計報告書

自 平成20年 1月 1日
至 平成20年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	8,188,287		奨 学 金	75,000	奨学生1名 (25,000円/1ヶ月) 平成20年1月～3月分 *H20年度は該当者なし
利 息	13,078	普通預金利息			
計	8,201,365		計	75,000	残高 ¥8,126,365

(表5) 金沢大学医学部史会会計報告書

自 平成20年 1月 1日
至 平成20年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	3,309,731				
利 息	5,283	普通預金利息	—	0	
雑 収 入	0				
計	3,315,014		計	0	残高 ¥3,315,014

会 計 監 査 報 告 書 平成20年度 金沢大学医学部創立23周年記念基金 上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証憑書類に開示がなく、 帳面高についても照合しないことを確認した。 平成21年 2 月 6 日 監事 倉田久雄 印 監事 加藤 聖 印 監事 正橋 剛二 印	
--	--

会 計 監 査 報 告 書 平成20年度 金沢大学医学部トキ研基金会計 金沢大学医学部トキ研基金基金会計 トキ研基金委員会製作委員会 高橋賢学会計 金沢大学医学部史会 上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証憑書類に開示がなく、 帳面高についても照合しないことを確認した。 平成21年 2 月 6 日 監事 倉田久雄 印 監事 加藤 聖 印 監事 正橋 剛二 印	
---	--

(表6) 平成21年度予算書 (案)

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	1,832,060		事 業 費	5,997,656	会報印刷製本代 2,700,000
会 費 収 入	12,580,000	21 年度会費 4,000 円 × 1,635 人 6,542,000			会報発送代 2,000,000
		過年度分 4,908,000			会費払込用紙印刷代 26,000
		平成 21 年度以降会費 480,000			アカンサス印刷代 50,000
		準会員会費 6,000 円 × 105 人 630,000			アカンサス発送代 50,000
		4,000 円 × 5 人 20,000			関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000
雑 収 入	183,480	預金利息 5,000			卒前研修支援 (SP 研修会支援) 200,000
名簿会計より繰越金	2,536,163	DVD に係る分配金 178,480			学生課外活動支援
基金より繰入金	2,000,000				(西医体) 300,000
					(立山診療班) 100,000
					(白山診療班) 100,000
					新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) @2,770×98 本 271,656
			旅 費	850,000	各支部総会への出張費、各県支部長総会招待費、 会報取材旅費 1,100,000
			会 議 費	330,000	総会、理事会、編集委員会 330,000
			慶 弔 費	100,000	弔電等 100,000
			補 助 費	2,700,000	記念館展示室整備 200,000
					図書館医学部分館整備補助 300,000
					学生課外活動補助 (ACLS) 80,000
					医学展補助 100,000
					「大学院医学系研究科」進学説明会補助 20,000
			事 務 費	2,730,000	新金沢大学附属病院完成記念行事 2,000,000
					払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、 通費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 550,000
					人件費 2,180,000
			雑 費	60,000	会報袋詰め作業代 (年 3 回分) 60,000
			支部への補助費	500,000	
			名簿作成費	4,500,000	印刷製本代、発送費、通信費、謝金等
			基金への繰込み	0	
			予 備 費	1,364,047	その他 1,364,047
計	¥19,131,703		計	¥19,131,703	

デアミナーゼとゲノム高頻度変異

分子遺伝学 (生化学Ⅱ) 教授 村松 正道

多種多様な病原体を排除するためB細胞は抗体分子を多様化させ、あらゆる外来抗原を認識し処理している。B細胞は抗原刺激後、somatic hypermutationによって抗体遺伝子可変領域の多様性を増大させる。somatic hypermutationは可変領域エキソンに点突然変異を導入する現象で、末梢リンパ組織中での抗原による選択後、抗体の抗原結合能力の飛躍的増大に結びつく。この現象は古くより抗体の親和性成熟として知られている。一方、定常領域はクラススイッチ組換えでその抗体分子の排除様式や輸送法が切換えられる。この現象によりB細胞は抗原特異性を変えないままIgG以外のクラス (IgMやIgE) を産生できるようになる。これら二つのメカニズムのお陰でB細胞は抗体遺伝子の多様性を驚く程増大させる事ができる。さらにはsomatic hypermutationとクラススイッチ組換えを完結したB細胞が長期間個体の中に留まる事により免疫記憶が成立し、次回の抗原侵入に備える事ができる。

私はこれまでこのダイナミックな現象に興味を持ち、特にクラススイッチ組換え現象の分子機序解明に携わってきた。研究開始当初は、どのような酵素がこの二つの現象を触媒しているかが未解明で

あったので、その責任分子を単離するべく種々の努力をした結果、運良く活性化B細胞特異的遺伝子であるAID (activation induced cytidine deaminase) をクローニングする事ができた。AIDは、核酸のCをUに変換する酵素活性があり、強制発現すれば、somatic hypermutationとクラススイッチ組換えをB細胞以外に起こせ、欠損させれば、somatic hypermutationとクラススイッチ組換えも欠損する。まさにsomatic hypermutationとクラススイッチ組換えを司る酵素である事が示された。また同時にAID欠損が常染色体劣性遺伝型クラススイッチ欠損症の原因である事を証明する研究にも寄与できた。

その後の研究によりAIDの標的認識機構が損なわれた時は、別の遺伝子座に間違ったsomatic hypermutationやクラススイッチ組換えが起こり、発ガンにつながる遺伝子異常が形成される事が判明してきた。AID活性の顛末が抗体遺伝子座の多様性増幅に結びつくか、あるいは不幸にして別の遺伝子座に働きガン遺伝子活性化に帰結するかの振り分けは、現時点ではまだよくわかっていない。このメカニズムを解明する事はBリンパ腫などの一部の発ガンメカニズムの解明

につながる可能性があるため当研究室の重要テーマとして研究を続けている。

一方、ここ数年、AIDと同じ deaminase familyメンバーである APOBEC3Gの研究から、もう一つの興味深い研究の潮流が起きている(図1)。HIVウイルスの一部の株は、APOBEC3Gが共存するとゲノムにG to Aの hypermutationが起こり、ウイルスの増殖抑制が起こる事が報告された。deaminaseは自然免疫の効果分子として働く可能性が上がってきたのである。当教室ではAIDがウイルスゲノムに直接 hypermutationを導入する可能性をB型肝炎ウイルス実験系を用いて検討している。我々の研究により、AIDはB細胞の獲得免疫の要の分子として広く知ら

AIDとそのファミリー遺伝子

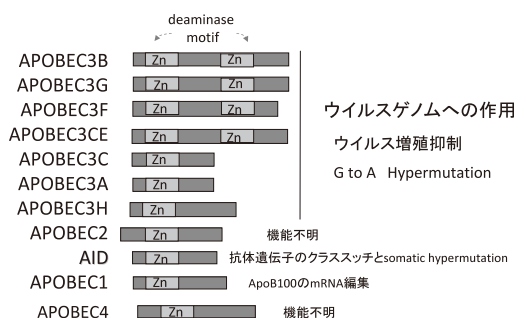


図 1

ウイルスゲノム hypermutation

自然免疫効果分子

Deaminase family

AID

Normal CSR & SHM

High affinity, IgG

B細胞の免疫記憶

Aberrant CSR & SHM

c-myc, Bcl-6, Pim1

発ガン

図 2

れる事となったが、実は自然免疫の効果分子としての役割もあるのではないかと期待している。私たちの研究室では、これまで蓄積してきたAIDについての知識と資材を最大に利用し、今後、deaminaseの標的識別機構や自然免疫の効果分子としての役割の可能性を追求していきたい(図2)。

良い人材と一緒に討論し、自由に考え、常にチャレンジ精神を忘れず、粘り強く継続すれば、必ず良い研究に結びつくと思っております。それをモットーにまだまだ力不足ではありますが、学生教育と研究に専念したいと考えております。十全窓会の諸先生方には、今後ともご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

臨床検査医学の新たな展開にむけて

血液情報統御学（臨床検査医学）教授 和田 隆志

臨床検査医学は、臨床医学と基礎医学の架け橋となる医学分野である。早期診断、疾患活動性評価、予防医学・健康管理、個別化医療はじめ幅広い医学・医療の領域において、臨床に立脚した鋭敏かつ非侵襲的な臨床検査診断法・バイオマーカーの開発と応用が求められている。

臨床に有用な臨床検査を開発・応用し、患者の福音につなげることは大きな目標である。平成二十一年度より、研究代表者として、糖尿病性腎症の病態解明と新規治療法確立のための評価法の開発を課題とした厚生労働科学研究が新たに開始された。この中でも、臨床検査・バイオマーカーの新規開発と臨床応用を重要な検討課題と位置付けている。この際、臨床上のリサーチクエスション・ブラックボックスを基礎研究に結びつける、そして基礎研究の成果を臨床の場に還元するという双方向性の視点を意識している。とりわけ、目の前の患者から学ぶことが多く、臨床を見る目の必要性・重要性を改めて痛感している（図1）。実際、症例に端を発し、新規のエリスロポエチン（EPO）活性阻害因子を見いだしその測定系を樹立した。この新規EPO活性阻害因子陽性例において、末梢血網赤血球減少および骨髓赤芽球減少が確認さ

れ、EPO不応（低反応）性と関連する可能性を考えている。したがって、本知見は貧血の病態に新しい洞察を加えるとともに、EPO不応（低反応）性の臨床的スクリーニングにつながる可能性が考えられる。さらに、EPO受容体は臓器修復・再生との関連も示唆され、新たな病態解明につながる可能性を秘めている。

新規の臨床検査の開発と臨床応用

“双方向性の視点”



図1

一方、基礎研究から得た知見を実際の日常臨床検査診断法に応用・還元する検討も行っている。最近、我々は末梢血中に存在する骨髓由来細胞、fibrocyteと臓器線維化との関連に注目している。FibrocyteはCD45等の白血球抗原とともにI型コラーゲンといった細胞外基質産生能を有するユニークな新規骨髓由来細胞である。これまで、腎線維化に關与すること、臓器保護効果があるレニン・アンジオテンシン系阻害薬の治療標的細胞であることを明らかにしてきた。一方、腎臓病は心血管事故の重要な危険因子であり、腎臓病と心血管事故ははじめ臓器障害をつなぐ臓器間ネットワークの存在が示唆される。このネットワークをつなぐ機序に、fibrocyteが関与することを

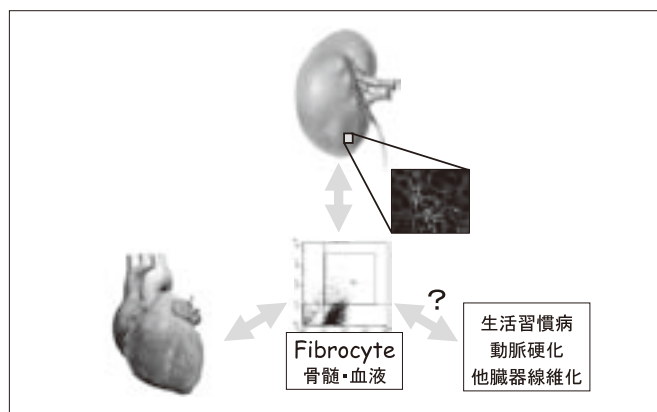


図2

明らかにしつつある。このfibrocyteはmyofibroblastの前駆細胞であるだけではなく、脂肪細胞への分化を示す知見を得ている。この成果により、線維化とも関連が深いインスリン抵抗性との相互関連に興味もたれる。これらの基礎研究の成果に基づき、日常臨床検査への応用に力点をおいている。実際、臓器線維化を反映する可能性があり、臨床応用にむけてさらなる努力をしていきたいと考えている（図2）。

今後も臨床を見る目を培いながら、腎臓病を一つの基盤として、謙虚にそして熱意を持って、新たな臨床検査医学領域の創出、臨床への還元・応用、社会への貢献を目指していきたいと考えている。そして、医学・医療の発展に少しでも貢献していければ幸いである。あわせて、学生への教育を一層充実するとともに、密接に関連する検査部を中央診療施設としてさらに活性化させ、各診療科・関連部署との密接な連携を構築していきたいと考えている。今後とも、十全同窓会の諸先生にご支援とご指導をいただければ幸いである。



新規生理活性ペプチドの探索と機能解析

分子神経科学・統合生理学(生理学Ⅱ) 教授 櫻井 武

G蛋白質共役型受容体は細胞膜を七回貫通する特徴的な分子構造を有し、多彩なリガンドに対応して外的シグナルを受容し重要な生理機能の制御を司る一群の受容体の総称である。ヒトでは六百あまりのGPCR遺伝子が存在すると推定されており、そのうち約百のGPCRは内因性のリガンドや生理的役割が不明の、いわゆる“オーファン受容体”として残されている。近年、これらオーファンGPCRの内因性のリガンドが次々に同定されつつあり、オレキシンや、グレリンなど、新規のリガンド-受容体系の発見から、生物学上の重要な発見につながったケースもある。現在臨床的に用いられている薬物の約半数がGPCRを標的分子とする薬物であることから、オーファンGPCRは創薬のターゲット分子としても潜在的な可能性を持っていると考えられる。

私は、テキサス大学に留学中、数十種のオーファンGPCRを発現させた細胞をアッセイ系として用いて、内因性リガンドを検索していたが、この過程で、ラット脳の抽出物から、二つのオーファンGPCRに対するリガンドとして全く新規の生理活性ペプチド二種を同定した。この発見をきっかけに新規神経ペプチドの探索とその機能解析によって、未知なる脳の機能を解明することが私の研究テーマとなった。こ

こでは、そのうちの二つを例に概説したい。

一、オレキシン

オレキシンAとBは摂食行動を制御する神経ペプチドとして見いだされた。その後、オレキシンの欠損が睡眠障害、ナルコレプシーの病因であることが明らかにされ、オレキシンは覚醒・睡眠状態の維持に重要であることが示された。近年、オレキシン産生神経の入出力系の解明により、大脳辺縁系、摂食行動の制御系、覚醒制御システムとの相互の関係が明らかになり、オレキシン産生神経は情動やエネルギーバランスに応じ、睡眠・覚醒を適切に制御し、行動を統合的に制御する機能を担うことが明らかになってきた。オレキシンを発現する神経細胞(オレキシン産生神経)は視床下部外側野(LHA)に局限して存在しているが、オレキシン産生神経は小脳を除き、中枢神経系全域に投射している。特に、睡眠・覚醒制御に関わるモノアミン作動性神経の起始核、青班核(LC)、縫線核(RN)や結節乳頭核(TMN)、腹側被蓋野(VTA)やコリン作動性神経の起始核、外背側被蓋核(LTD)や脚橋被蓋核(PPT)に密な投射が見られる。オレキシンの受容体、OX1RおよびOX2Rも脳内に広範な部位に分布するが、LCではOX1Rのみが発現しているのに対し、TMNではOX2Rのみが発現している。

オレキシン遺伝子欠損マウス、またOX2Rの遺伝子欠損マウス、OX2Rの遺伝子に突然変異が生じたイヌ、あるいはオレキシン産生神経欠損マウスでは、ヒトのナルコレプシーと酷似した病態を呈する。さらにヒトのナルコレプシー患者の死後脳においてオレキシン産生神経が脱落していることが示されている。このから、オレキシンは「睡眠・覚醒相の安定化」に重要な働きをもっていることが明らかになった。

オレキシン産生神経が投射するモノアミン・コリン神経系の核(LC、RN、TMN)は睡眠・覚醒の制御に深く関与している。これらは、視床および大脳皮質に投射し、覚醒の維持に関わっていると考えられている。

近年、われわれは、オレキシン産生神経の電気生理学的解析と組織学的な解析により入力系を明らかにするとともに、オレキシン産生神経に入力する上流の神経細胞群を同定してきた。オレキシン産生神経は、大脳辺縁系やVLPPOのGABA作動性神経、縫線核のセロトニン作動性神経からの入力を受けていることが明らかになっている。大脳辺縁系(扁桃体や分界条床核)からオレキシン産生神経への出力は情動にともなう覚醒レベルの上昇にかかわっていると思われる。

一方、VLPPOは、睡眠中枢であり、睡眠時に活性化され、抑制性の神経伝達物質をもつ神経細胞があり、モノアミン系の神経にGABA作動性の抑制性の投射をすることによって、睡眠を惹起する。オレキシン産生神経も睡眠中枢の産生神経によって抑制される。この系により、睡眠時はオレキシン産生神経の活動は低く維持されていると考えられる。

また、飢餓時など、エネルギーバランスが

負に傾いたときにはレプチンレベルの低下や、血糖値の低下によりオレキシン産生神経が活性化することによって、覚醒レベルが上がり摂食行動を支えることを見出した。

このようにオレキシン産生神経は、生体の内外の環境に応じて適切な覚醒を維持し、行動を支える機能をもっている。病的状態では不眠症などにも関与していると思われる。現在、オレキシン拮抗薬が優れた睡眠導入薬として期待されている。その他にもオレキシン系に作用する薬物(拮抗薬や刺激薬)が不眠症や過眠症、薬物依存あるいは肥満など各種病態の治療に役立つことが期待される。

二、神経ペプチドBと神経ペプチドW (Neuropeptide B/W)

扁桃体の最も重要な働きは、感覚情報の生物学的な価値評価であると考えられている。GPR7はオーファンG蛋白質共役受容体としてみつかった遺伝子であるが、われわれのグループは脳抽出物からNPB(neuropeptide B)、NPW(neuropeptide W)をリガンドとして同定している。GPR7は扁桃体中心核や分界条床核に局在するため、扁桃体の出力系を制御する働きがあることが推測できる。GPR7ノックアウトマウスを用いた詳細な検討により、GPR7はストレス恐怖、脅威に対して適切な行動をとる、また適切な自律神経系の反応を惹起するという、生存するにあたって大切な反応において重要な役割を担っている事が明らかにされた。

参考文献

Sakurai T. Nat. Rev. Neurosci. 8, 171-181, 2007; Sakurai T. et al. *Neuron* 46 (2): 297-308, 2005; Yamanka A. et al. *Neuron* 38:701-713, 2003; Hara J. et al. *Neuron* 30:345-354, 2001; Chemelli, et al. *Cell* 98:437-451, 1999; 92:573-585, 1998; Sakurai T. et al. *Cell* 92:573-585, 1998; Matsuki et al. *PNAS* 106:4459-6, 2009

追悼文

太田五六名誉教授追悼

金沢大学医学系研究科形態機能病理学研究分野(旧第二病理学講座) 教授

中沼 安二



金沢大学名誉教授、前第二病理学講座主任教授太田五六先生は、平成二十年(二〇〇八年)九月九日、満八十六才のご高齢でお亡くなりになりました。九月十日に通夜、ならびに九月十一日に本葬儀が執り行われました。

先生は、大正十一年(一九二二年)三月金沢市にお生まれになり、旧第四高等学校をご卒業、昭和二十一年に旧金沢医科大学をご卒業になっておられます。同年金沢医科大学副手、昭和二十二年病理学教室助手、二十五年に講師に昇任され、二十六年に旧金沢医科大学より医学博士の称号を授与されておられます。同年、金沢大学医動物学教室助教授、そして昭和四十八年に金沢大学医学部第二病理学教室教授に昇任され、昭和六十二年に定年により退職されておられます。この間、先生は医学部学生ならびに大学院生の病理学・研究に心血を注いで来られ

ました。血管内皮、肝臓病学がご専門であり、多くの研究成果を国内外の学術専門誌にご発表になっておられます。特に、昭和三十三年から二年間、米国ニューヨークのマウントサイナイ病院の肝臓病理学の世界的権威であるハンスポッパ教授の研究室に留学され、肝疾患と免疫に関する先駆的な研究をなされ、免疫病理に関する研究をなされ、その研究成果を昭和三十五年に世界的な一流誌であるJournal of Experimental Medicineに発表されておられます。米国で肝臓の病理学を学ばれ、また免疫病理を研究され

帰国されてからは、日本の肝臓病学の第一任者として活躍され、世界でも高い評価を受けて来られました。また、先生は金沢大学評議員として、金沢大学医学部、さらに金沢大学の管理運営に深く関与され、貢献されとともに、金沢大学医学部十全同窓会理事長として同窓会の発展に多くの業績を上げられました。特に、医学部と地域関連医療機関や病院との医師や教員の人事交流が円滑に行われる様ご尽力なされました。これらの研究教育の功績が高く評価され、昭和六十二年に金沢大学名誉教授の称号を授与されておられます。また、ご退官後、昭和六十三年四月に、魚津市にあります富山労災病院の院長に就任されておられます。院長としての病院の管理運営に多く

の功績をあげられたのみならず、病理解剖や外科材料の病理診断も積極的ななされ、富山労災病院の発展に貢献されました。平成七年三月に院長を退職されてからは、悠々自適の生活を送ってこられました。

太田先生は、助教授の時代から既に、教室の主任をなさって来られ、教授就任後は主に肝臓の病理を専門に研究を進めて来られました。太田先生の教室には、多くの学徒が集まり、多くの学位論文の指導、研究指導をなさって来られました。私もその一人であります。太田先生の教室出身者は、病理学の分野のみならず、臨床、疫学、またパラメディカルの領域でご活躍になっておられます。先生の学会活動は、肝臓学会、病理学会、肝臓研究会が中心であり、これら学会の管理、運営にも尽力されました。肝臓学会では評議員を長く務められ、さらには肝臓学会西部会を会長として金沢市で主催され、多くの肝臓病学者が金沢市に集まり、活気、熱気ある学会でした。これらの貢献が評価され、肝臓学会名誉会員の称号が授与されました。また日本肝臓研究会で多くの研究成果を発表され、さらに本研究会の管理運営に務められ、会長として、金沢市で肝臓研究会を主催されておられます。また、厚生労働省の難治性肝炎調査研究班、肝内結石症調査研究班、特発性門脈亢進症調査研究班の班員を長らく務められ、病理分科会長も務められ、多くの業績を上げられました。先生の金沢大学在職中の業績は「太田五六教授開講十周年記念業績集」および「太田五六教授退官記念業績集」として纏められております。

これらの研究教育に関する業績が高く評価され、平成十年に勲三等瑞宝章を受賞されました。第二病理学教室関係者が金沢市に集い、先生の業績を全員でお祝いをさせて頂き、先生の益々の健康と長寿をお祈りしましたことが昨日の様に思い出されます。

私は、太田先生が第二病理学教室を主宰されてからの最初の入局者の一人であり、太田先生からは病理学のみならず、多くのことを教えて頂きました。先生がご退官になられた後、第二病理学教室を主宰させて頂いております。教室の開講祝賀会や忘年会などの行事には、毎回出席して頂いており、また数年前に私が金沢市で主催しました肝臓研究会でも元氣なお姿を拝見し、ご祝辞もいただきました。太田先生の専門とされた肝臓病理学は、現在の金沢大学医学系研究科形態機能病理学の主要な研究テーマであり、多くの研究者、学徒により研究がつけられております。研究成果は、学会に発表することはもちろん、学術誌に論文として発表するのが、国の税金を使って研究している研究者としての義務であるとお教えに従って、研究を進めております。今、ここに太田先生の在りし日を忍びつつ、金沢大学医学系研究科および形態機能病理学研究分野、第二病理学講座を代表しまして、心から先生のご冥福を御祈り申し上げます。



村上誠一名誉教授追悼

金沢大学医学系機能回復学(旧麻醉・蘇生学講座) 山本 健



金沢大学名誉教授、医学部麻醉学教室初代主任教授 村上誠一先生は、平成二十一年五月十三日に逝去されました。享年八十二歳でした。ご遺志に従い、葬儀は近親者による密葬が執り行われました。このことを報告いたします。また、平成二十一年七月五日には、昭和二十六年金沢医科大学卒業生の「双六会」、金沢大学医学部第一外科学教室同門会、金沢大学医学部麻醉・蘇生学教室同門会の共催で、「村上誠一先生を偲ぶ会」を開催させていただきました。

村上誠一先生は、麻醉科学という専門分野を北陸に根付かせたパイオニアであり功労者でありました。外科系各科から教官助手に人員を派遣していただき、日々の麻醉業務をこなした教室の黎明期を知る者として、十五を超える関連病院で麻醉科専門医が活躍をしている今日の基礎を築かれた村上先生のご功績とご辛苦に、深甚の敬意と感謝とを捧げます。

村上誠一先生は昭和二十六年に金沢医科大学(現金沢大学)をご卒業になり、国立金沢病院で一年間の臨床研修の後、昭和二十七年に金沢大学第一外科学教室に入局されました。当時の第一外科学教授は久留勝(くるまさる)先生でしたが、村上先生は当時を想い出されて「久留先生は色紙に「車猿」と署名された。ユーモアの判る先生でした。」と懐かしそうに話されたのが記憶に残ります。昭和二十九年末からは後任の卜部教授のもとで人工心肺の研究に没頭し、昭和三十四年に博士号を授与されました。

昭和四十一年三月の麻醉学講座開講に伴い、村上誠一先生は第二外科学の逸見稔先生とともに、同講座の助教授に昇任されました。外科系教授が麻醉学講座教授を併任する変則的な体制も相まって、昭和四十六年に大橋雅広先生と(故)定常雄先生が入局されるまで、麻醉学講座に入局する医師はありませんでした。その後次第に医局員が増えるなかで、村上誠一先生は若い医局員を「金の卵」として、育み守って下さり、昭和五十三年二月には初代の麻醉学講座主任教授に選任されました。

研究面ではご専門の筋弛緩薬、脳蘇生とともに、緩和医療の重要性を早くから強調され、手術麻醉と、ペインクリニック・緩和医療の分野で優れた業績を残されました。最近、塩酸ケタミンを数日

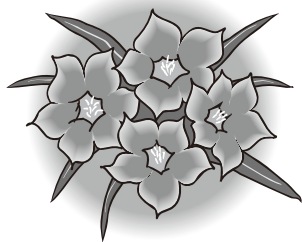
一週間持続点滴して難治性疼痛を治療する試みが海外でなされていますが、村上先生は三十年以上も前にこの治療法を難治性電撃痛患者に試み、症状の軽快を得て先進的な症例報告をされています。臨床研究、基礎実験のいずれについても、研究意欲のある医局員に対しては自主性を重視され、自由なテーマで研究をさせて下さったことも、その後の講座の発展に大きく寄与しました。昭和六十一年には第二十回日本ペインクリニック学会長、昭和六十三年には第三十五回日本麻醉学会会長を務められ、二つの全国学会を金沢で主催されて、麻醉科学とペインクリニックの発展に大きく貢献されました。また、平成元年には金沢大学評議員に任命されておられます。

村上誠一先生のお父上(金沢大学名誉教授 村上賢三先生)が中国黒竜江省ハルビン医科大学で教鞭を執られた経緯もあり、在任中に中国の留学生を数多く受け入れられたことも特筆に値します。留学生は小林勉助教授(当時)の肺表面活性物質研究の一翼を担い、また長期留学生は厚生省の許可を得て、手術室で麻醉科医として活躍してくれました。当時の中国人留学生のうち三名は現在中国各地で大学麻醉科の主任教授として、一名は渡米してペンシルバニア大学麻醉科の准教授として、それぞれ活躍しています。

村上賢三先生の教え子であったハルビン医科大学麻醉科の(故)鄭方教授は、村上誠一先生の人的支援と黒竜江省政府からの資金援助によって、「黒竜江省中日友好麻醉講習班」という麻醉の理論・実技講習会を昭和五十六年から十一回にわたって実施しました。当時中国の麻醉

技術は日本と二十〜三十年の差があり、黒竜江省の遠隔地のみならず、中国各地から若い麻醉科医が多数この講習会に参加しました。村上誠一先生は、金沢大学麻醉学講座の若手医局員を順次講師として派遣されました。派遣される若手医局員にとっては、連日通訳を介しての講義と実技供覧が続く、珍しくもまた厳しい三週間を体験しました。

村上誠一先生は、がん疼痛治療の業績により平成二年に第四十四回北國文化賞を受賞され、またハルビン医科大学との長年の交流に対して、ハルビン医科大学名誉教授の称号を贈られました。平成四年にご退官になつてからは、短歌の会「雷鳥」を主宰され、また安楽死協会の北陸地区のリーダーとして活躍になりました。先生はスポーツマンシップを愛され、理非曲直に厳しく、俠気を大切にされました。先生からいただいた薫陶は、われわれ弟子達の中にいつまでも生き続けます。先生の遺徳を偲び、ご冥福をお祈り申し上げます。



故 西田尚紀先生を偲んで

金沢大学長 中村 信一



金沢大学名誉教授西田尚紀先生は、平成二十一年六月二十二日に八十八歳の生涯を閉じられました。先生は昭和二十一年に金沢医科大学を卒業され、谷友次教授主宰の細菌学教室に助手として入られました。先生は文系出身（旧制第四高等学校文科卒業）の医学生として、自然科学の講義に仲々なじめぬ中で心に迷いを持つうち、レゾンデートルを求めて中国へ行くこうと思いい中国語を勉強し、伝染病の勉強でもしたら医者としていつか中国に行けるとの思いで細菌学を選ばれたと話されていました。

先生は昭和二十五年に講師、昭和二十七年に助教授に昇任され、そしてイギリスLeeds大学C. J. Oakley教授の下に留学中の昭和三十四年に微生物学講座の教授を拝命され昭和三十四年四月に就任されました。教授就任後、医学部補導委員長、医学図書館長、金沢大学評議員、医学部長等の要職を務められました。先生は斬新なお考えを持つ改革者であられました。医学図書館長は昭和五十二年

四月から六年間務められ、その間、図書館委員会を立ち上げ、利用者が自由に書庫に入れる様にし、カウンターを一カ所にまとめるなど運営の合理化を図り、さらに時間外開館を延長し、利用者のニーズに応える等、現在の医学図書館の運営の基礎を作られました。また、昭和五十九年から二年間の医学部長の間には、昭和六十年の第四十五回全国医学部長会議で論文「国立大学医学部の助手の身分と職掌について」（十全医学会誌第九十四巻第四号、六〇五—六一三、昭和六十年）を提示し、助手の重要な立場を力説し、助手を「教員（teaching staff）」とするよう執念を燃やされた。また、教育環境に関しても一言を持ち「叢林なくして禅なし」が口癖で十全講堂前幅三十米、長さ百七十米の道の両側に亭々たる並木道を予想し櫟を植え、校舎寄りの櫟の下に煉瓦じきの歩道を作られた（岡本肇名誉教授、藤田幸雄博士基金による）。昭和五十九年学部長就任と共に当時殆ど無秩序状態のキャンパス交通整理を目指し、駐車有料化を含めて二年がかりで管理実施に漕ぎ着けられたのも上述の信念に由るものでした。

先生は教育においても革新的であられ、昭和三十四年に教授に就任された時、イギリスで経験した学んだこともあり、「学生の教育を主体としたスタッフ」をつくる事を決心され、細菌学、ウイルス学、免疫学、細菌遺伝学の専門家からなる講

義・実習システムを構築されました。

先生は学生が大好きで、また学生からも大変慕われました。講義の出席には厳しく、実習ノートの採点は三角、丸、二重丸でした。薫陶を受けた大勢の学生達は誠に幸運であったと言えます。

研究面では、イギリス留学までは当時大流行していたジフテリアの原因菌であるジフテリア菌の毒素産生に関する研究に取り組み、「ジフテリア菌は増殖しながら、その大多数は直ちに死滅するという特殊な増殖様式を持つ。この過程で容易に毒素は溶出する」ことを明らかにされました。このことは細菌学の世界的専門書であるTopley & Wilson's Principles of Bacteriology, Virology & Immunity Vol. 2, p. 99, (一九八三)に先生の論文が広く引用・記載されました。

先生はイギリス留学中、古城を訪ね、瞑想し「あ、そうか！外毒素を出す菌のほとんどはクロストリジウムである！」と気付かれ、教授就任後はクロストリジウムの毒素産生機構の研究一本槍で突き進み、土壌から数百株にも及ぶ菌株を分離することにより「孢子形成と毒素産生の関係」を追究し、素晴らしい研究成果を挙げられました。これらの研究成果はパスツール研究所のProf. P. ShaefferのBacteriological Review 33:4871 (一九六九)に全面的に引用され、広く世界に知られるようになりました。これらの研究に対し、日本細菌学会賞、小島三郎記念文化賞、中日文化賞、北國文化賞等が授与されております。先生の研究に対する基本姿勢は「日本には量的な研究がない。例えば、C. tetani株といえはH47だけ、これでは本当の破傷風、C. tetaniがわからない」であ

り、教室員は細菌学研究における菌株の多様性の重要性を強く教え込まれました。

先生の念願の中国入りは昭和五十二年に実現し、日本細菌学会日中部会長として日本と中国の細菌学に関する国際会議、「日本中国国際微生物学会議（CJICM）」開催の道筋を付けられました。第一回の会議は昭和五十九年に上海で開催され、以後平成九年（六回）まで二、三年毎に開催された。これらの功績に対し平成六年第二十一回大山健康財団賞が授与されました。

先生は十全同窓会の理事、評議員、会計、監事、そして昭和六十一年から顧問として、同窓会の発展にご尽力されました。昭和五十七年六月二十日の十全同窓会結成五十周年記念式典における記念講演「十全出典由来」は記憶に残る名講演で、その後現在に到るまで「十全」のバ イブルとなっておりま。

先生の主たる学会は日本細菌学会であります。理事、第四十八回総会長、評議員、評議員会議長、国際交流委員、学術集会委員、用語委員、教育委員長、日中部会長、中部支部長を務められ、学会の発展に尽力されました。また、昭和三十年に中心の主唱者として「毒素シンポジウム」を興されています。

先生は文系出身らしく、文学青年の趣があり素晴らしい文章をお書きになりました。昭和三十七年に百周年を迎えた金沢大学医学部の百年史の編集長並びに著者として、一時失明するまでの苦心の末昭和四十七年に百年史を刊行されました。又、平成五年に刊行された「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」には顧問として編集に携わりました。細菌学会に

あつては「日本細菌学会の五十年」(昭和五十三年五月刊行)を編集委員長として編めました。昭和六十一年の退官に際し自伝「四十四年の夢」を著し、その後「酒田の医者の本間様」(昭和六十二年)、「炎のごとくー玉井健三」(昭和六十三年)、「五十年随想」(編)(平成七年)、「続埋火」(編)(平成十一年)を書かれました。そして平成十九年十月三十一日に最後の書「一本の道 流れゆく時と共に」を刊行されました。

先生の趣味は草野球で、ポジションはピッチャー、決め球は蠅がとまる様なカーブでした。学生と教員との試合、あるいは細菌学会では東西戦を企画され、また、医局対抗戦を楽しみにし、毎日屋上やグラウンドでピッチングの練習を行い、運動不足の解消を図られていました。

先生は本当に穏やかであられました。私に対しても、「奮闘努力せよ」と励ますにも、「叱り方が下手だね」と教えるにも、暖かくユニークな方法でご指導下さいました。先生の後任として教授に任じられてからも、困ったときには先生に相談させて頂きました。先生に話しを聴いて頂くだけで、不思議なことに問題解決の糸口が見えてきました。その度、先生は「中村君、結局どうなんだ」と怪訝な様子でしたが、私にとつては魔法の力でした。

先生は「糖尿病だから糖分を摂らんといかんのだ」等とおっしゃっていました。が、まさに「一病息災」のお手本でした。今後とも先生を見習い、教えを賜った一同、「一病息災」で長く生きるよう努力いたしたいと思います。

先生のお人柄を偲びつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌

編纂へのご協力をお願い

平成二十四(二〇一二)年に本学創立百五十周年を迎えるにあたり、医薬保健研究域医学系では金沢大学医学部創立百五十周年記念事業準備委員会の下に記念誌編纂のための委員会を結成し、編纂作業を進めております。すでに優れた先達による「百年史」と「百年史以後三十年の歩み」とが刊行されていますが、委員会一同、創立以来平成の現代に至る本校の歴史が俯瞰されとともに、未来へのさらなる発展とそのための方力の拠り所となるような「百五十年史」を編纂したいと志しております。通史、教室史、余滴(学生時代の思い出/エピソード)、写真、その他の五部を基本に構成し、A4版フルカラー冊子体として刊行する予定です。その他の部では、「第一号シリーズ」(外国人留学生第一号、女子学生第一号、学位記第一号など)、学術上の業績に対する顕著な賞(日本学士院賞など)の受賞などが企画されております。

つきましては、同窓の諸兄姉には記念誌編纂へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。とくに、記念誌掲載にふさわしいと考えられる歴史的資料、写真類や、余滴用エピソード(約千字)、「第一号シリーズ」の候補がございましたら、左記委員会または委員宛ご提供いただければ幸いです。返却を要するものにつきましては、データとして取り込ませていただき次第お返しいたします。また、各教室および関係者には、教

室史等に関して別途ご協力をお願いする予定ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。なお、限られたスペース、予算や編集の上で、ご提供いただきました候補のすべてを掲載しかねる場合も予想され、採択につきましては編纂委員会にご一任願いたい旨申し添えます。

進捗の状況に応じ、必要と考えられる事項を会報に掲載させていただく予定です。ので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

(山本 博 記)

記

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌編纂委員会(委員長 山本博、委員 加藤聖・山本健・三邊義雄・太田哲生・中尾眞二・中村裕之・吉崎智一・佐々木素子・和田隆志、特別委員 寺畑喜朔・山口成良・赤祖父一知・中村信一、事務担当 池森順一・米林利晃)

委員会連絡先

〒九二〇一八六四〇

金沢市宝町十三番一号

電話 〇七六―二六五―二一〇五

FAX 〇七六―二三四―四二〇二

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌編纂委員会

事務担当

総務課医学総務係長

米林 利晃

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業へのご寄附のご案内

○同封の振込依頼書により銀行の窓口からお振込みいただきますようお願いいたします。

(ATM及びインターネット・バンキングを利用されると寄附者の特定ができませんので遠慮ください。)

○ゆうちょ銀行及び北陸銀行本支店窓口からお振込みいただく場合、手数料は無料です。その他の金融機関からお振込みいただく場合は、手数料を別途ご負担いただくこととなります。

○お振込みの際は、ゆうちょ銀行の場合は左側の二つ、他の銀行の場合は三つ全てにご記入ください。

○通信欄の該当事項□にチェック及びご記入をお願いします。

○ご寄附金単位 個人一口…一千元

(注意)

金沢大学基金(金沢大学基金事務室)では医学部創立百五十周年記念事業に関する募金を取り扱わないこととなりましたので、医学部創立百五十周年記念事業へのご寄附については、同封の振込依頼書にて取り扱いただきます。お間違いないようお願いいたします。

【お問合せ先】

金沢大学宝町地区事務部総務課

〒九二〇一八六四〇

金沢市宝町十三番一号

Te l 〇七六―二六五―二一〇五

Fax 〇七六―二三四―四二〇二

E-mail t-isomu@adm.kanazawa-u.ac.jp

金沢大学医学部創立150周年記念事業趣意書

金沢大学医学部は、平成24年（2012年）をもって創立150周年を迎えます。これを記念して、これまでの歴史を整理するとともに、将来に向けた新しい布石のために、150周年記念事業を計画しました。

金沢大学医学部は、長崎大学、東京大学に次いで3番目に古い歴史を有し、文久2年（1862年）3月加賀藩が金沢彦三番丁に開設した種痘所（反求舎）に源を発し、幾多の変遷を経て今日の発展を見るに至った長い歴史を有しています。その間、医学の教育・研究の府として社会の要請にこたえ、多数の有為の人材を卒業生として送り出し、医学研究の面で輝かしい業績を挙げるとともに、わが国の医療に大きな貢献をしてまいりました。

このたび、創立150周年を迎えるに当たり、更なる発展を遂げるために教育研究環境の整備・充実が必要であるとの思いから、下記のような記念事業を計画いたしております。

- 1 十全講堂から正門までのメインプロムナードの総合的整備事業
- 2 医学部記念館の改修事業
- 3 医学部150年史の編纂事業
- 4 記念シンポジウムの開催
- 5 記念式典の開催

これらの記念事業の展開のために、教職員・学生、同窓生はもちろんのこと、広く産業界の皆様から、2009年10月から2015年3月の6年間の期間に寄附金を募りたいと考えています。趣旨及び事業内容に御賛同くださいますと、お力添えを賜りますよう切にお願い申し上げます。

なお、医学類教員につきましては、趣旨に賛同し事業の一助となるよう既に平成20年6月から毎月給与からの積立てを行っております。

2009年10月

金沢大学医薬保健学域医学類長・
金沢大学医学部長

金子 周一

金沢大学医学部十全同窓会長

佐藤 保

金沢大学医学部十全同窓会理事長

古川 仨



十全講堂から正門までのメインプロムナード 金沢美術工芸大学 教授 坂本 英之

受賞

山本 恵一 (昭和二十八年卒業)

富山 (医科薬科) 大学名誉教授
第三十七回 医療功労賞 “海外部門” を受賞

右掲の賞は医学研究とは異質の社会活動 (国際医療協力) を対象とすることをご諒解戴きたく存じます。

選考基準として海外での活動歴が五年以上で、主催者側の現地調査をクリアする等の条件に基き、ブラジルでの実績が

通算十五年を超えた私が海外部門の授賞該当者と認められて、十六名の国内医療功労者とともに授賞の光栄に浴しました。私の仕事は以下の二項目に要約出来ます。

(一) 一九九四年以来富山大学医学部、

馬淵宏特任教授 (昭和三十年卒業)
国際動脈硬化学会 特別賞受賞

第十五回国際動脈硬化学会が米国ボストンで六月十四から十八日まで開催されました。第一日目のセッションで、金沢大学脂質研究講座客員教授の遠藤章先生と特任教授馬淵宏先生の二人が招待講演をされ、学会長の米国Tufts大学Schaefer教授より国際動脈硬化学会特別賞を受賞いたしました。遠藤章先生はいくまでも第二のベニシリンともよばれるスタチンの発見者であり、世界中で毎日三千万人もの高コレステロール血症、心臓病、動脈硬化症の患者さんが服用しております。遠藤先生は、昨年、米国版ノーベル賞というべきラスカー賞を受賞されました。一方、馬淵宏先生はそのスタチンを世界に先駆けて臨床応用さ

特別賞受賞

れ、家族性高コレステロール血症患者への効果と安全性を明らかにし、その論文を一九八一年のN Eng J Med誌に発表したことは世界的に広く知られることです。ノーベル賞受賞者であるGoldsteinは、N Eng J Med誌にEditorial を寄稿し、この臨床研究の価値を賞賛しております。またこの論文は、New York Times誌にも紹介されました。論文発表から二十五年以上経過した今日でもなおその研究の価値が大々的に評価され、国際学会での賞受賞につながったことは誠に特記すべき点であり、いかに先見の明があったかを改めて実感させられたわけでありです。

(小林 淳一 記)

千葉大学真菌医学研究センター、金沢大学、東京大学医科研、京都大学、関西医科大学、北里大学等から消化器疾患診療各部門の専門医六十余名の交互派遣を企画実現する一方で国際協力機構 (JICA) 予算・機材供与 (十二年間に総額十五億円余) を得て医療格差の是正、国際レベルへの向上を達成しました。

(二) 一九九八年から前記千葉大学、富山大学共同で現地エイズ発病者の死因の首位を占めていた合併真菌感染症の制圧技術を提供し、二〇〇二年にはサンパウロ周辺地域での死亡退院率を

四・四％から二〇・九％に半減せしめ、とくに乳幼児死亡率を三・三％から二・九％に著減させることが出来ました。さらに二〇〇九年より、千葉大学・現地医療機関とJICA・日本文科省との共同プロジェクトをアフリカ南西部諸国 (アンゴラ等) に指向して実施しますが、その具体策として、一九九四年以来の日本からの移転技術を習得したブラジル人医師もそれに参加し、対アフリカ (エイズ) 医療支援を行ないます。

以上

小林 哲郎 (昭和四十九年卒業)
山梨大学医学部第三内科
日本糖尿病学会賞 (ハーゲドーン賞) を受賞

この度、第五十二回日本糖尿病学会 (大阪市) において [Slowly progressive insulin-dependent (type) diabetes mellitus (SPIDDM) : 緩徐進行I型糖尿病の診断、病態および進展阻止に関する研究] に対しハーゲドーン賞を受賞いたしました。この賞は「国際的に認められ、評価の確立した研究業績に与えられる」と規定されています。私の今回の受賞はII型糖尿病と考えられている症例の中にインスリン分泌能が緩徐に低下して最終的にはインスリン依存状態となるI型糖尿病のサブタイプが存在することを見いだした業績に加え、その脾病変、自己抗体、遺伝因子そしてβ細胞障害の進展阻止といった一連の研究成果が認められたものと考えます。本学卒業後で

は岡本宏東北大学教授について二人目で大変光栄に思っております。私は昭和四十九年に金沢大学を卒業し、虎の門病院、山梨大学では臨床的な問題からテーマを設定するスタイルで研究活動を進めております。どの大学でも厳しい環境ですが、臨床病院では出来ない基礎的な研究ができる環境に感謝しながら日々過ごしています。恩師小坂樹徳先生虎の門病院名誉院長からは「先生は一生研究を続けなさい。いいですか、生ある限りですよ。」という言葉を頂き、決意を新たにしている次第です。最後に今日まで竹田亮祐前同窓会長をはじめ十全同窓会会員諸先生から頂いた多大のご援助に心より感謝したいと思えます。今後ともご指導の程、心よりお願い申し上げます。

中嶋 憲一(昭和五十四年卒業)

バイオトレーサー診療学

二〇〇九年各賞(日本核医学会機関誌論文賞)を受賞

日本核医学会機関誌Annals of Nuclear Medicineは金沢大学久田欣一名誉教授(当時の日本核医学会理事長)のもとで、一九八七年に創設された国際誌です。この機関誌論文賞・久田賞は、久田先生の「寄付により創設されたもので今回が第一回になります。この度、受賞した論文(Prognostic table for predicting major cardiac events based on J-ACCESS investigation)は、日本人を対象にした心臓核医学検査後の予後調査J-ACCESS研究から作成された大規模データベースを基に、三年間の心事故発生を予測する予後予測表(Heart Risk Table)を作成した研究に対するものです。SPECTデータを基に多変量解析から主要心事故の発生率を予測するこの研究成果は、本年五月十三日にスペインのバルセロナで開催された国際心臓核医学会議(ICNCG)でも、Best Regional Abstract Awardを受賞しました。恩師久田先生の創設された日本核医学会機関誌において受賞できましたことを光栄に思うと同時に、心臓病領域で核医学的診断法がさらに利用されることを願っています。

和田 泰三(平成四年卒業)

金沢大学附属病院小児科
第五回十全医学賞

この度、榮譽ある第五回十全医学賞をいただき大変うれしく光栄に存じます。受賞テーマは「遺伝子変異の復帰(reversion)が原発性免疫不全症の臨

床像に与える影響」です。遺伝子変異のreversionとは、ある疾患の原因遺伝子において遺伝子変異が正常配列に戻るか、あるいは元の変異を代償するような第二変異が起ることです。原発性免疫不全症においてreversionが起った際には、機能を回復した細胞により臨床症状の改善が期待されるため「自然の遺伝子治療」としても注目されています。非常に稀と考えられていた本現象ですが、米国衛生研究所に留学していた二〇〇〇年以降、幸運なことに何例ものreversion症例に巡り会うことができました。一連の解析から、reversionは特に原発性免疫不全症においては予想以上に高頻度で認められること、多様な分子生物学的基盤を有すること、臨床像を改善あるいは修飾させる因子として重要であることなどを明らかにすることができました。今回の受賞を励みにさらに研究を進展させ、本現象を治療に応用できないか等、さらなる検討を行いたいと考えています。最後に、研究の機会を与えていただきました小児科前教授の小泉先生、これまで研究にご協力いただきました先生方、また直接ご指導いただきました小児科の谷内江教授に感謝いたします。

池田 博子(平成十四年卒業)

金沢大学附属病院病理部
平成二十一年各賞(Hepatology Research賞)

平成二十一年六月四日、五日に神戸ポートピアホテルで開催されました第四十五回日本肝臓学会総会で「Hepatology Research賞」を受賞しました。欧文誌『Hepatology Research』で二〇〇八年に掲載された原著論文

「Tumor necrosis factor- α induces the aberrant expression of mucus core protein-2 in non-neoplastic biliary epithelial cells via the upregulation of CDX2 in chronic cholangitis」を対象とした審査の結果、選考されました。

私は形態機能病理学(旧第二病理学)教室入局後、肝内結石症の病態解明を目的とした分子病理学的研究を行ってきました。今回対象となった論文では細菌感染に重要な役割をもつサイトカインであるTumor necrosis factor (TNF- α)に注目し、TNF- α が肝内結石症の慢性胆管炎で散見される腸上皮化生に関与するkey factorであることを報告しました。論文が評価されたことを大変光栄に思っております。

これまで研究にご協力いただきました先生方、また直接ご指導いただきました中沼安二教授に感謝申し上げます。

第七回高安賞

平成二十一年七月四日に金沢大学十全記念館で開催された十全同窓会総会の席上で、研究科長から三名の医学系研究科大学院修了者に「高安賞」が授与された。最優秀論文賞は呉保博士に、優秀論文賞は宇野将文博士と高島伸一郎博士に授与された。

「高安賞」は、高安右人先生(本学眼科三代目教授、旧制金澤医科大学の初代学長)の本学および我が国、世界に対する多大な貢献と業績を記念して平成十五年に制定されたものであり、今年で七回目となる。高安先生は、高安病の発見者

であり、この疾患は明治十四年四月に福岡市で開催された第十二回日本眼科学会で最初に報告された。その原著論文は十全会雑誌第五十号に掲載されている。「高安賞」は本学同窓会会員臼井滋氏(昭和三十九年卒業)からの寄付を基金として発足したものである。対象は、医学系研究科の課程制大学院を修了した者で、優れた学位論文を発表したと評価された者を表彰し、学術研究の振興および若手研究者の育成に貢献することが目的である。毎年、複数の委員からなる「高安賞」選考委員会で厳正な審査が行われ、今年は六十二編に及ぶ英文学位論文が選考対象となった。第七回の「高安賞」に選ばれた右記三名、さらに僅差で及ばなかった医学博士の諸君には、今後も研究に、診療に活躍され、自らの業績を伸ばし、さらに本学の名声を高められんことを切に希望する。

(中沼 安二記)

第五回 黒川良安賞及びスロイス賞

今年で五回目となる黒川良安賞及びスロイス賞の授与式が執り行われました。黒川良安賞は、卒業する学部学生の中から大浜多鶴子さん、川北哲也さん、吉田光紗さんの三名が選ばれ、平成二十一年三月二十三日の学位記伝達式の席上で授与されました。

また、三年次修了者を対象としたスロイス賞は市村裕輝さん、山口順子さん、渡辺悟さんが選ばれ、平成二十一年四月七日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与されました。

(金子 周一記)

学会報告

第三十六回
日本脳科学学会

去る平成二十一年六月十二日、十三日の両日に第三十六回日本脳科学学会が、金沢大学医学記念館で脳情報病態学三邊義雄教授の主宰で開催されました。

日本脳科学学会の前身は脳研究会（昭和四十九〜平成六年）という研究会でした。そして、この脳研究会はGABA・GABOBおよびその関連物質研究会（昭和三十四〜四十八年）と日本条件反射学会（昭和三十四〜四十八年）を母体にしていました。つまり日本脳科学学会はその歴史を遡ると今年で丁度五十年目となり、我が国の脳科学関係の学会では最も伝統ある学会です。

さて、我が国の二十一世紀最大の社会的課題は子どものこころの危機といっても過言ではありません。児童、生徒による不幸な犯罪、教育現場の混乱などがそれを物語っています。また、思春期女性に特有と思われる摂食障害は小学生にも波及し、しかも、その数が増えています。これらの現状に鑑み、平成二十一年度、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達研究科（通称、「子どもこのころの連合大学院」、HP開設済）が設立されました。日本脳科学学会は今後この「子どものこころの連合大学院」の機関紙、JMBD (The Journal of Mind & Brain Development)（発行、金芳堂）の編集にあたり、我が国のこころと脳の研究に一層の責任を担うことが今後の学会の新しい方向となっております。日本

脳科学学会は、これまで、医学系、薬学系、実験心理学系、工学系の会員で構成されてきました。JMBDの編集を機に、日本脳科学学会は連合大学院への入学が見込まれる臨床心理学、教育学、社会学・社会福祉学、保健・看護学からの会員を募ることに致しております。

このような学会の新しい方向を踏まえ、何よりも金沢大学が連合小児発達研究科の一員であることから、今回の学会テーマを、「子どものこころの脳科学」とさせて頂きました。特別講演一題、ランチオンセミナー一題、一般演題二十三題に加え、十三日のシンポジウムは大会テーマに沿い、中村和彦先生（浜松医大）、谷池雅子先生（大阪大学）の司会進行のもと、連合大学院の構成員である大阪大学、浜松医科大学、金沢大学の三校から二人づつのシンポジストの発表がありました。いずれも動物研究、遺伝子関連、



左より 大村名誉教授 奨励賞受賞者二人 森理事長 三邊会長（懇親会にて）

脳画像関連、臨床研究の広汎な範囲にわたる興味深い発表でした。

懇親会も、十二日にニューグランドホテルで盛大に行われました。乾杯の音頭は、学士院賞受賞者で金沢大学名誉教授でもあられる大村裕先生にお願い致しました。先生は今年八十四歳になられますが、本学会でも一般演題を発表されるなど、その学問への情熱は後に続く我々に大きな刺激でございました。次回の開催は中国天津市であり、国際的交流の場としての本学会の発展も期待されます。

最後に本学会を御支援、御協力賜りました、学会関係、金沢大学関係の皆様へ改めまして、心よりお礼申し上げます。

（三邊 義雄 記）

十全医学会
学術集会

平成二十一年度の十全医学会学術集会のテーマは「分子イメージング」であり、バイオトレーサー診療学（核医学）絹谷晴剛教授をコーディネーターとして四名の先生方から最新の成果を中心にご講演を頂いた。

はじめに先端医学薬学研究センター・臨床研究開発部、松成一朗部長から、分子イメージングの脳・循環器疾患への臨床応用についての概説を伺った。松成一朗先生は、二〇〇二年より脳老化・神経病態学（山田正仁教授）と共同で石川ブレインイメージング研究を開始し、これまで九五〇名以上のボランティアおよび二八〇名以上の認知症疑い患者のPET、

PET、MRI画像データを蓄積しておられ、その成果を披露された。

続いて、放射線医学総合研究所・分子病態イメージング研究グループ、佐賀恒夫先生には、腫瘍イメージング研究を開始以来三年強にわたる研究成果を中心にご講演頂いた。抗体イメージングにより、原発巣・転移巣を含む全身の評価が可能になれば、治療の奏功する患者の適正な選択に貢献できると期待される。現在、EGFR、Her2やc-kit、中皮腫マーカーであるmesothelinなどを標的とする抗体イメージングの検討を行っており、感度・定量性に優れるPETイメージングへの応用に向けて、低分子量抗体（Fab）と中半減期ポジトロン核種（Cu-64、半減期十三時間）を用いた検討をスタートされたそうです。

放射線医学総合研究所 分子イメージング研究センター・分子神経イメージング研究グループ、伊藤浩先生は「脳神経伝達機能の分子イメージング」について講演された。先生のグループでは、ドーパミン系神経伝達機能を対象に正常画像データベースの構築を行い、従来死後ヒト脳で検討されてきたドーパミン作動性神経系の前シナプス機能および後シナプス機能の解剖学的分布を生体においても



明らかにされた。また、PETの臨床試験への応用としては、マイクロドーズ試験をお考えで、レセプターの占有率測定のような既存のPET用トレーサーを用いての新規治療薬の用量設定に取り組んでおられる。

最後に自然科学研究機構生理学研究所脳機能計測・支援センター、根本知己准教授のご講演「多光子励起顕微鏡法による細胞機能の分子イメージング」では、麻酔下のマウスの樹状突起スパインや軸索終末の構造、第V層のsomatic dendriteのin vivoイメージングを直接しめされ、参加者の目をスクリーンに釘づけにした。先生は、「人体機能の統合的な理解のためには、生きた状態を保ったまま、それら相互作用ネットワークをありのまま捉えなければならぬ」というお考えのもとに個体用in vivo二光子顕微鏡システムを開発されており、現在、最も高い深部到達性と分解能を両立できた顕微鏡の評価を受けているとのことでした。

各講師の先生方は、講演の冒頭でそれぞれのお立場での「分子イメージング」の定義を話され、基礎から臨床までの幅広い知識が得られ充実した学術集会でした。

(大井 章史 記)

金沢大学 関連病院長会議

今年の五月に新金沢大学附属病院工事が新外来棟、新玄関ホールの完成をもって完了しました。そこで今年（平成二十一年七月四日）の金沢大学関連病院

長会議は、例年のホテルではなく病院外来棟の最上階（四階）の宝ホールで開催されました。この会は金沢大学関連病院長（石川ブロック四十四、富山二十四、福井十三、その他三）と金沢大学附属病院教授・医局長などにより構成されており、総出席者八十八名（関連病院からは五十四名、大学病院からは三十四名）で意見交換し懇親を深めました。総会議事は会計報告、役員の異動報告など滞りなく終了したのち、前以て関連病院から病院長にいたっていた説明希望事項を元に重点的に以下の内容を述べさせていただきました。

① 金沢大学附属病院完成について

まず四月二十五日の新病院完成式典に多数ご参加いただいたお礼を述べ、新外来は予約制を基本としますが、た



らいまわしや門前払いはありません、患者の容態や医師からの紹介状の内容に応じ臨機応変に善処していくこと、旧外来棟の解体作業が今秋から始まること、臨床研究棟（医局棟）の新築計画を文部省に要請中であること、などについて説明しました。

② 金大附属病院と関連病院の関係について

金大附属病院から関連病院に派遣している医師について、ご協力いただいたアンケートをもとに整理した結果、石川県には六八一名、富山県には四八二名、福井県には一七九名、北陸三県以外の病院には五十六名でした。地域医療を支えていくうえで今後一層、各関連病院との親密な連携が大切であることをお互いに再認識しました。

③ 臨床研修医制度について

医師は、医師免許を取得後の初期研修二年間で一人前になるものではなく十年かかるのが常識であり、そのためには大学病院を中心とした生涯教育体制が大切である。この認識の下に厚生労働省による臨床研修医制度の大幅な軌道修正が行なわれた。おかげで来年度は研修医の金大病院希望者の増員が見込まれるので、金大病院と各関連病院と連携して若手医師の育成に一層力を入れていきたい。

④ 医師の育成について

近年の本会議で「この関連病院長会議が金大病院に対してどんなふうに参加できるか、しっかり考えよう」「金大病院を中心として行なわれている若手医師育成の支援をしたい」という意

見が相次いだので、これを受けて昨年「石川県地域医療支援センター」を設立しましたが、「石川県と限定しない柔軟な窓口を検討してほしい」などの発言が多く寄せられました。そこで立法行政とも相談のうえ「金沢大学病院医療支援機構」支援窓口を設立しました。これによりいかなる公的・私的機関からでも安心して支援行為ができるルーツが敷かれました。各関連病院と行政機関とで相談の上、医師の生涯育成のため協力をしていただけますようお願いしました。

その後、同じく宝ホールで懇親会が開かれましたが、偶然、研修中の医師、看護師さんたちにも参加していただくことになり、例年以上に和やかな会となりました。

(富田 勝郎 記)

御遺骨返還式・ 合同慰霊祭

平成二十一年の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月二十日（土）午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まった。事務局の東田昌弘会計課長による開式の辞にはじまり、平成二十年度献体者のご芳名が拝誦され、金子周一医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様が述べられた。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長 梶

谷忠司様、理事長 井沢義武様をはじめとした、しらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、金子周一医学類長、医学系研究科・医学類と附属病院の教職員、医員、学生が出席して始まった。東田昌弘会計課長が成願者二十五名のご芳名を拝誦し、黙祷をさされた後、祭主の金子周一医学類長が追悼の言葉を述べられた。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、金子周一医学類長が御遺骨をご遺族に返還された。最後に学生を代表して杉森慎君（三年生代表）が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して神経分布路形態・形成学分野 尾崎紀之が感謝とお礼の言葉を申し述べた。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれた。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、金子周一医学類長、大学教職員と学生が参列し焼香、参拝した。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部（川瀬泰輔教授の御時）から現在に至るまでの約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井沢義武理事長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいている。午後二時、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン愛児（明治十二年歿）の墓碑にも奉拝した。

第一〇七回合同慰霊祭は午後二時半に始まった。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百七十二名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、金子周一医学類長、中

沼安二研究科長、太田哲生附属病院副院長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が参列した。黙祷の後、金子周一医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をされた。最後に太田哲生副院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となった。

七月九日（木）、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者孟蘭盆会法要が営まれた。あいにくの天候ではあったが、しらゆり会理事長 井沢義武様、しらゆり会役員の方々のご出席を仰ぎ、金子周一医学類長をはじめとする医学類の教職員多数の方々が参列された。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈った。

（尾崎 紀之 記）



二十一年度 オープンキャンパス

本年度の医学類オープンキャンパスは、平成二十一年八月六日・七日の両日にわたって医学類第三講義室にて行なわれた。それぞれの日の午前の部・午後の部に分け、計四回ほぼ同じ内容で行なわれた。参加者は年々増加傾向にあり、今年度は二日間で三百六十二人を集め大盛況となった。また父兄の参加も増加しており、受験に対する取り組み方の変化が感じられた。

内容は、まず受付とともに「金沢医科大学時代の教育・研究・診療風景」のDVDを流し、医学類の古き良き伝統を伝え、続いて金子学類長から医学類の入試概要と教育概要についての説明があり、スライドを使って推薦入試と前期入試の説明や、医学類における教育内容と医師を目指す心構えなどの説明が丁寧に行なわれた。その後、清水学生支援委員長から医学類の大学生活について説明があり、スライドを使って医学類における学生相談体制、サークル活動、各学年における学生生活の様子などがわかりやすく説明された。そして最後に教員・在学生との懇談会が行われ、参加者のアンケートに書かれた質問に対して教員・在学生が答える形



で進行された。教員は教育委員会から多和田、山岸、小泉、中村委員に出席していただき、熱心な応対をしていた。また昨年度から医学類在学生の代表として医学展実行委員会から三、四名の学生に参加してもらい、最初に医学展をアピールした後、懇談会に参加してもらっている。本年度も在学生から入試や学生生活に関する生の声に参加者に多数届けられ、大変好評を博した。

本年度は以上の内容を計四回行なったが、各日の午後のプログラムには模擬講義が行われ、六日は吉崎教授による「思春期の頭頸部ウイルス感染症Ⅰ」のタイトルで、受験生に身近なEBウイルス感染症についてわかりやすい説明があり、七日には櫻井教授から「脳内物質の探索と脳機能」のタイトルで、脳内における情報伝達の仕組みや病気との関連についての解説があった。両講義とも参加者にはとても好評で、医学を目指す気持ちへの良い刺激になったとの声が多く聞かれた。

オープンキャンパス参加者には医学類独自のアンケートが行われたが、参加者の声としては、このオープンキャンパスが非常にためになった、医学類を目指すという動機づけになった、医者になるといふことがどういうことかよく分かった、医学類の学生生活やサークル活動などに興味を持った、金沢大学医学類に進みたくなった、医学類はとてもいい学生がいて楽しそうだなど、ほとんどが「来てよかった」という意見であった。これからもっとオープンキャンパスを充実させ、より良い学生を受け入れるために努力を続ける必要があると痛切に感じた二日間であった。

（学生支援委員長 清水 徹 記）

十全学術行脚 第十六回

―保健学系(二) 病態検査学―

昭和四十七年に創設された医療短期大学部は、平成七年に医学部保健学科に改組され、平成十六年の大学院部局化を経て、平成二十一年に金沢大学の組織変更に伴い医薬保健学域保健学系となった。病態検査学講座は臨床検査技師の教育を行う検査技術科学専攻を担当しており、多くの同窓会員が医学科から転入して教育に当たっている。検査技術科学専攻は一学年の定員が四十名で、学生の教育は二十名の教員が担当し、九名の同窓会員が在籍している。多くの教員は医学類での講義や附属病院での診療も兼務している。



河原 栄 教授

河原栄教授（昭和五十四年卒業）は短大時代からの生え抜きで、病理学を担当して

いる。研究面では癌細胞の細胞外マトリックスへの接着と癌細胞の遊走に関するシグナル伝達経路の研究を行っている。この分野では、以前は解析技術が限られていて、機能に関する直接的な証拠を得ることは困難であった。しかし最近では、目的の遺伝子を有するプラスミドが容易に手にはいるように

なったこと、質量分析が容易にできるようになったことなどにより、機能の解析が簡単にできるようになった。検査技術科学専攻の学部学生、大学院生に基本的な科学的思考方法を身につけさせるには適当な研究方法のようで、多くの学生が楽しみながら、あるいは苦しみながら日夜実験に取り組んでいる。臨床的な面では、癌細胞の形態と機能がよく分かる細胞検査士を育てるために、北陸がんプロフェシヨナル養成プログラムに臨床検査技師コースを設置した。在学中に細胞検査士資格試験合格を目指して、北陸を代表する八人の細胞診専門医や細胞検査士に講義をして頂く予定を立てている。



藤田信一 教授

藤田信一教授（昭和四十九年卒業）は、附属病院で感染対策室長を兼務する臨床

床細菌学の専門家である。病原微生物のinternal transcribed spacer領域（ITS領域）の多様性を利用したPCR法（ITS-PCR）による菌種同定用データベースを構築し、細菌と真菌の一五七菌種について一、三、五二パターンを登録している。この方法により敗血症、血管内カテーテル関連感染症の原因菌の

迅速同定が可能になった。二〇〇八年四月からは金沢大学附属病院において血液培養を対象にITS-PCRがルーチン検査としてスタートし、迅速で適正な抗菌薬の使用に貢献している。また、黄色ブドウ球菌では、ITS-PCRパターン（約八〇種類）とSCC mecタイプおよび毒素産生性との間に一定の関連性があることが示されるとともに、ITS-PCRパターンからみたMRSAの進化過程が明らかになりつつある。一方、CTX-M型の基質拡張型βラクタマーゼ（ESBL）産生菌が増加していることから、bla CTX-M遺伝子の塩基配列を決定してわが国に侵淫しているESBL産生菌の現状について検討している。



笠原善仁 教授

笠原善仁教授（昭和五十七年卒業）は、小児科出身で、谷口昂名誉教授、宮

脇利男富山大学小児科教授のもとで免疫学の指導を受け、准教授を経て、二〇〇八年九月から保健学類に赴任している。小児の免疫発達、免疫制御機構の異常、特にCD95（Fas）誘導性細胞死の異常から発症する自己免疫疾患（自己免疫性リンパ球症候群、ALPS）やEBV関連リンパ増殖性疾患の病態解析を中心に研究を続けている。また、金沢大学病院の小児科ではI型糖尿病外来にて四十名のI型糖尿病の管理指導を続けると共に、二十五年以上北陸小児糖尿病キャンプに携わり、現在も中心的役割を担っている。



稲津明広 教授

稲津明広教授（昭和六十一年卒業）は竹田亮祐教授の第二内科の大学院で、馬

淵宏助教授（現脂質研究講座特任教授）および小泉順二助手（現総合診療内科教授）のご指導の下、高脂血症、糖尿病、動脈硬化性疾患の診療と研究を開始し、コレステリルエステル転送蛋白（CEPT）欠損症の遺伝子解析で優れた業績を残している。平成九年から医学部保健学科助教授に赴任し、医学検査学分野で臨床化学を中心に、臨床検査技師の教育および研究指導を継続し、平成二十一年四月に教授に昇任して、大学院生や卒研究生と研究室を立ち上げている。



本多政夫 教授

本多政夫教授（昭和六十三年卒業）は旧第一内科の出身で、慢性肝炎、肝硬変、

稲津教授は伝統ある旧第二内科の症例を基に、主にリポ蛋白代謝異常を検討して来たが、今後はCEPT欠損症以外の高HDL血症の遺伝的成因解析を進め、近年注目されているHDL介入治療の基礎知識としてのHDL機能測定法の開発や感染症、炎症、動脈硬化の共通病態メカニズムを繋ぐバイオマーカーを同定することにより、臨床化学や循環器予防医学の分野を発展させたいと頑張っている。

肝細胞癌に関わる研究に携わっている。我が国の慢性肝炎の約六〇―七〇%を

占めるC型慢性肝炎について、C型肝炎ウイルス(HCV)の複製機構の解明と阻止を目的とし、HCVが複製に必要なとする宿主因子を同定し、新たな抗ウイルス療法の確立を目指している。

またインターフェロン(IFN)療法に関連して、IFN治療の応答・不応答のメカニズムを明らかにして、治療効果の改善を目指した研究を行っている。このような研究に加え、肝細胞癌が発症した場合に対して、それに対する新規治療法の開発に関わる研究も行っている。特に現在、国内第Ⅲ相臨床試験が行われている非環式レチノイドの作用機序についてモデルマウスを用いて研究を進めている。今年度から新規採択された厚生労働省の「肝臓に対する新規治療法の開発」研究班の班長を務めていることは特筆すべき点である。



馬渡一浩 准教授

馬渡一浩准教授(昭和五十五年院修了)は、生化学教室の出身で、専門基礎科目の生化学、専門科目の生化学、生化学実習などの講義・実習を担当している。

研究は、魚類の視神経切断後に起こる視覚機能回復過程を中枢神経の再生のモデルとして考え、この再生に関与する分子および分子メカニズムを脳情報分子学・加藤聖教授と共同研究している。これまで、視神経切断後に金魚網膜内で発現が増加する遺伝子を見出し、この分子の視神経軸索再生過程に

おける役割を明らかにしてきた。さらに、この分子がゼブラフィッシュの発生における網膜神経細胞の層構造形成にも重要な働きをすることを明らかにした。今後は、再生のごく初期に変化する分子をスクリーニングし、再生に必要な遺伝子発現の調節のしくみを明らかにしたいと考えている。また、食物や食品中の栄養素や機能性分子の分析法および定量法に関する研究も行っている。



森下英理子 准教授

森下英理子准教授(会員Ⅱ)は旧第三内科の出身で、松田保名准教授の指導の下血栓止血学の臨床・研究に取り組み、臨床検査医学講座助手を経て、平成九年に保健学科に赴任後から現在に至るまで、一貫して血液凝固学の研究に従事してきた。保健学科では先天性凝固異常症の病態解析、炎症と血栓形成の機序、不育症と血栓との関連、迅速な血栓症診断のための血液分子マーカーの開発などをテーマとして、卒業研究の学部生および修士・博士大学院生合わせて十三名程度の研究指導を行っている。大所帯のため、研究資金の慢性的不足が最大の悩みであるという。一方で、本年八月から石川県より

委嘱された女性医師メンターとして、金沢大学附属病院の女性医師就業継続支援にも従事している。先生自身三人の子育てをしながら、ここまで臨床・研究を継続してこられたのも、関係の諸先生方のご理解とご協力があったからこそと感謝しており、今後は若い女医さん達が働きやすい環境作りに、多少なりとも貢献していきたいと考えている。



古荘浩司 准教授

古荘浩司准教授(平成七年卒業)は、恒常性制御学講座循環器グループに所属し、一貫して不整脈の臨床・研究に取り組んできたが、本年七月付で病態検査学准教授に就任した。平成十四年に第一内科前助教授の阪上先生とともに本邦で初めてelectroanatomical mappingを用いた心房細動に対するカテーテルアブレーションを開始して以降、心房細動に対する薬物・非薬物療法の発展に関わってきた。近年はさらに植込み型除細動器(ICD)、心臓再同期療法(CRT)、アブレーションといった非薬物療法を中心として、重症心不全と心室性不整脈に対しての集学的治療による治療成績を改善すべく臨床・研究を進めている。今後は金沢大学において臨床検査技師・臨床工学士・看護師を含めた循環器チーム医療のレベルアップを図るとともに、さらに循環器・不整脈診療に力を注ぎたいと願っている。



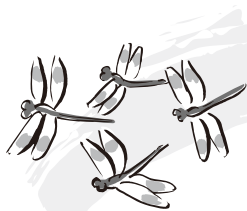
大竹茂樹

最後に大竹茂樹(昭和五十二年卒業)は専攻主任のほか、共通教育機構副機構長、北陸がんプロフェッショナル養成

プログラム教務委員長などを兼務し、主に教育畑で大学運営に貢献している。昨年度から開始され、医薬保健学域の一年生四百名全員が受講する「医薬保健学基礎」の開講にも関与した。研究面では世界的な白血病研究組織であるJapan Adult Leukemia Study Group (JALSG)のデータセンター長として、web database management systemを運営し、日々更新される白血球の臨床研究データの管理と解析に当たっている。また、白血病における遺伝子変異の解析に取り組んでおり、附属病院血液内科や検査部との共同で一貫して白血病の検査、治療法の研究を行っている。

医療崩壊の危機が叫ばれる昨今、質の高い医療技術者を育てることは時代の要請である。病態検査学講座では、高度なチーム医療の実現には学生教育における動機づけが重要であるとの考えに基づき、医学系の各講座、附属病院の各診療科や検査部との連携を深めながら、学生の教育に情熱を燃やしている。

(大竹 茂樹 記)



病院紹介

国家公務員共済連合会
横浜栄共済病院

敗色の濃くなった世界大戦末期に「秋水」という名のロケット推進戦闘機の開発が目指されました。ドイツ占領下のフランス・ロリアンからシンガポールを経てもたらされたメッサーシュミットMe163Cの資料をもとにした試作された機体で試験飛行が行われ、その根幹であるロケット燃料は情報不足の中で、当地にあつた第一海軍燃料廠（燃料工場）で、理化学研究所などの英才を集めて合

成されました。

当院は、この第一海軍燃料廠に働く従業員や家族のための職域病院として一九三九年七月十五日に創立され、本年が創設七十年にあたります。大船海軍共済組合病院と称し、海軍軍医大佐が院長に就いていましたが、戦後は国家公務員共済連合会に経営が継承され、使命を地域医療貢献に位置づけることとし、病院名も大船共済病院となりました。遠く離れた金沢大学と当院との結び付きは、戦後の混乱期に医師が枯渇し、空襲を免れて大学病院機能が保持された金沢大学に医師、ならびに病院長派遣を要請したことに始まると聞いています。

当院所在の横浜市中区北部には京浜東北線が走り、西部には東海道線と横須賀線などが接続する大船駅と那珂中央駅時代の象徴である松竹大船撮影所そばに発展

した駅前繁華街があります。大船駅から横浜駅まで十七分、東京駅まで四十三分、新宿駅まで四十七分の時間で到達し、当院が本郷台駅から徒歩六分の好立地に建っていることから、東京や横浜市みなとみらい地区で開催される研究会、学会などへの参加も容易です。当院の所在地はもととも鎌倉市大船地区ではなく横浜市戸塚区でしたので、一九八六年十一月に人口増加に伴い戸塚区から栄区が区分したことを契機に、横浜栄共済病院に改称されて現在に至っています。

栄区内の住宅建設は現在も続いています。とりわけ盛んであったのは一九八〇年代でした。当地に終の棲家を得た青壮年が年齢を増しており、人口十二万五千人あまりで、高齢化率は二二％と横浜市中区で最も高い比率を示します。急性期型病院は当院以外になく、また隣接する鎌倉市十七万四千人は高齢化率が二六％とさらに高く、公的機関が運営する病院がありません。栄区医師会員数は七十四名、医師会員一人あたりの人口が一、六八六名と算出され、横浜市平均一、〇二三名を大幅に超過しています。また、栄区の一床あたりの人口は二二二名であり、横浜市平均一三一名と乖離しています。

国家公務員共済連合会は年金八兆円を運用すると共に、全国に七十八施設、従業員一一、五七六名を管轄しており、病院は三十五病院一万三千三百床で、金沢大学関連病院にあげられるのは、当院と舞鶴共済病院、北陸病院です。当院は許可病床四三〇床、十九診療科、臨床研修指定病院、DPC対象病院などの指定を受けており、昨年の年間累計紹介率

六三七％が得られ、地域医療支援病院の申請を行っている段階です。

厚生労働省の指示する医療計画制度のうち、四疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病）および一事業（救急医療）に関して連携体制を構築し、この分野の診断と治療を地域完結型とすることを目指す方向で院内外の方々と論議を詰めています。栄区医師会はもちろん、鎌倉市医師会でも当院から開業された先生が活躍されており、心強い支援を受けています。当院は従来から循環器分野に強く、脳卒中に関しては当院脳神経外科グループが横浜南部の診療連携ネットワークの中心となっており、糖尿病に関しては十分な診療体制が得られています。今後、がん診療の充実、ER型（北米型）救急医療の導入を目指したいと考えます。

当院医師の六〇％あまりが金沢大学から赴任あるいは派遣の医師です。遠方でもありますので、金沢大学の第二内科、第一外科、整形外科、脳外科、麻酔科などの各医局にはとりわけ優秀なスタッフを依頼して来ました。これに伴い、横浜市大、聖マリアンナ医科大学、東京医科大学などから来られた医師も負けないような力量のスタッフで占められ、海外留学経験のある医師が院内に十数名いるといったように学術的な雰囲気を得られております。しかも、医局内では出身大学、各科の障壁を取り払い、多くの初期臨床研修医を交えて、意思疎通の良い体制です。

医療は労働集約的な業務ですので、医師に働きやすい場所を提供し、大きな源泉である金沢大学との絆を強固とし、しかもプロパーな医師の育成も目指すと言

う多面的な発展を構想しています。冒頭で述べた第一海軍燃料廠では、原材料の枯渇の中で松根からの燃料油の製造にも携わったことを思い、様々なアイデアを出し合って、地域の健康度の向上を推進して行きます。

（院長 細川 治 記）



病院紹介

国家公務員共済組合連合会 北陸病院

沿革

国家公務員共済組合連合会北陸病院は、昭和三十一年十一月九日非現業共済組合連合会北陸病院として金沢市の南端に誕生し、今年で創立五十四年目を迎えます。

開院当時は、内科・外科の二診療科で、ベッド数百床（うち結核病床六十八床）、職員数二十八名からのスタートでありました。当時の国民病であった結核疾患に対応するため、当地よりの強い要望の結果発足した病院でありました。しかし、結核疾患が漸次減少したことに伴い、昭和三十九年には四十床を増床（一般病床、結核四十床に変更）すると同時に、小児科・産婦人科を増科して一般病院への転換を図りました。昭和四十六年には、人工腎臓透析センターやCCUを開設しています。昭和五十七年には、許可病床の変更がなされ百五十床（うち結核三十床）となり、リハビリセンターを開設いたしました。昭和六十年には、産科婦人科が廃科となり代わりに放射線科、泌尿器科を開設しました。平成五年人工透析の拡充のため、血液浄化センターを、平成六年には、整形外科および健康管理センターを開設しました。平成七年には、小児科が廃科となり消化器科、循環器科を開設しました。平成八年には、結核病床

は廃床となり一般百二十床のみに変更となっています。平成十七年には、呼吸器外科、心臓血管外科を開設し、心臓手術も開始しています。このように、幾多の変遷の結果、現在の診療体制となっています。

また、地域医療連携強化のため平成十六年には地域医療連携室を新設し、平成十七年には開放型病床の開設や以前からあった訪問看護部門をステーションへと転換をいたしました。

平成十八年二月には日本医療機能機構を受審して認定を受けています。

他方、昭和四十年には金沢市広坂診療所、昭和五十五年には金沢市新神田診療所を開設して、内部共済職員の検診業務や診療充実にも努めてきました。

施設の面では、平成十一年より現地に於て病院改築工事にとりかかり、まず平成十三年十月に地下一階地上五階建ての本館診療棟が新築され、そして平成十四年五月に管理棟が改築されて、新改築工事が完了しています。新改築を契機に、三次元画像構築が可能なマルチスライスCTスキャン、ハイブリッド型シンチレーションカメラ、デジタルアンギオ装置、MRI（1.5T）への更新・稼働を開始いたしました。また、平成二十一年四月には、六十四列CTスキャンに更新しています。平成二十一年五月には、電子カルテを導入しておりまた同年七月よりDPC対象病院に移行しています。

現況

当院は、金沢市の南西金沢市市営グラウンドに隣接した閑静な文教地区の一角にあります。病棟からは、近くに野田山、

遠くに医王山が望めます。平成二十一年四月現在職員数一八三人（医師十三人、嘱託医師十三人）、許可病床数は、一二五床、看護基準十二です。当院は、急性期医療を掲げております。入院は一日一〇八人、外来は三三〇人で、内科・消化器科・循環器科・外科・整形外科・泌尿器科・呼吸器外科・心臓血管外科・診療放射線科の九科で診療を行っています。専門外来は、ほかに糖尿病外来・足外来・禁煙外来・肩関節外来を行っています。金沢大学の協力で神経内科・リウマチ膠原病科・脂質代謝科・心臓血管外科の外来診療が行われています。また、KKR北陸訪問看護ステーションや現在二十床からなる開放型病床制度や地域医療連携室を運営して、地域住民や開業医の先生方との医療連携を深めながら診療を行っています。平成六年開設の健康管理センターでは、主に健診や半日及び一泊ドックを運営しています。

病院の理念

平成十八年の日本医療機能機構の受審の際、基本理念を「地域の皆様から、親しまれ、信頼される病院をめざします」と掲げています。

おわりに

医療を取り巻く厳しい環境の中、国家公務員共済組合連合会病院では、平成二十年度より五年間の中期計画のもと、健全な経営と安全な医療をめざして運営されています。今後とも金沢大学ならびに十全同窓会諸兄のご支援をお願いいたします。

（院長 追分 久憲 記）



教室だより

脳老化・神経病態学

(神経内科学)

本教室は、一九八二年に金沢大学医学部附属病院の診療科として新設され、初代神経内科専任教授高守正治の就任に始まる。一九九一年、金沢大学医学部神経内科学講座が設置される。二〇〇〇年に山田正仁が第二代教授に就任し、二〇〇一年四月に大学院医学研究科・脳医科学専攻・脳病態医学講座・脳老化・神経病態学(神経内科学)となる。

【研究】

一、アルツハイマー病(AD)及びアミロイド関連研究…本教室は、二十一世紀COEプログラム・革新脳科学プロジェクト、「知的クラスター創成事業」第一期の研究を終え、平成二十一年度からは文部科学省・「知的クラスター創成事業」第二期の研究拠点として、ADを中心とした早期診断・予防治療法開発研究を推進している。また、平成十七年度から厚生労働省難治性疾患克服研究事業「アミロイドシスに関する調査研究」班(研究代表者…山田正仁)が当教室に設置され、わが国アミロイド研究の拠点となっている。さらに、多施設共同研究アルツハイマー病総合診断体系実用化プロジェクト(J-ADNI全国臨床研究)のコア施設として、AD早期の客観的評価法確立に尽力している。これらの研究の臨床的基盤として、大学病院における「もの

忘れ外来」、七尾市中島町における脳健診・認知症予防プロジェクト(なかじまプロジェクト)を構築した。これらの中で他の研究施設と共同で早期診断支援システムの開発を行っている。また、福井大学、UCLA等との共同研究として、ADのAβ、パーキンソン病およびレビー小体型認知症(DLB)のαシヌクレイン蛋白(αS)の凝集機構の解析を行い、AD患者におけるAβ凝集環境の異常、AβおよびαS凝集阻害・分解薬(予防・治療薬)等を報告し、臨床応用に向けた研究を推進している。

二、プリオン病研究…本教室には、クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)サーベイランス委員会(委員長…山田正仁)が設置され、わが国のプリオン病臨床研究拠点となっている。現在までに、初期診断が困難なMM2型孤発性CJDの臨床診断法、わが国初の変異型CJD、日本に多発し大きな社会問題となっている硬膜移植後CJDの臨床的特徴および診断、医療行為に伴うCJD発症の危険などを報告するなど、臨床的・公衆衛生学的に重要な貢献をしてきている。

三、画像研究…脳画像に関しては、先端医学薬学研究センター(羽咋市)との共同研究(Ishikawa Brain Imaging Study / IIBIS)を行っている。ここでは、健康者と認知症患者のMRI、PETを検討し、健康者では脳糖代謝は低下しないこと、早期ADでは海馬領域で糖代謝亢進がみられることなど興味深い知見を報告してきた。さらに、最近

ではアミロイドイメージング、大脳白質障害の研究も行っている。

心臓の交感神経機能を画像化する^{123I}-MIBGを用いた研究では、この核種を用いたシンチグラフィで、心臓へ取り込みがレビー小体病において、特異的に低下することを世界に先駆けて明らかにした。我々の知見をもとにして、この検査は、DLBの国際的な臨床診断基準に採用されている。本年度から全国多施設共同研究を実施し、この検査の有用性の高いエビデンスを証明していく予定である。

四、免疫性神経疾患…重症筋無力症(MG)や多発性硬化症等研究を行っている。MGの病態を明らかにする新規抗体の発見や抗体測定法を開発し、抗アセチルコリン抗体の認識部位を明らかにし、また、治療抵抗性を示す患者に対してタクロリムスの有効性を実証している。現在、ランバート・イートン筋無力症候群の病態解明のため自己抗体の特異性に注目して研究を進めている。

上記以外の研究として、脳血管障害の神経超音波学的研究、遺伝性神経疾患に関する分子遺伝学的研究、多くの臨床研究や疫学研究を実施している。

【診療】

附属病院神経内科として外来・入院(二〇床)を担当している。年間外来延べ患者数八一五八人、初診患者数九五五人、年間退院患者数一七八人(いずれも二〇〇八年)を数え、内容も神経変性疾患、免疫性神経疾患、脳血管障害等救急疾患から慢性疾患まで多彩な神経疾患を有する患者の診療を行っている。二〇〇一年から「もの忘れ外来」を開設

し、世界基準の認知症診療を行っており、「もの忘れ外来」初診者数は七七五人(二〇〇九年六月現在)となっている。

【教育】

一、学生教育

医学類四年生には「神経内科学系統講義」、「神経内科学臨床講義」、「診断学実習」「チュートリアル」を、四・五年生には「臨床実習」を、六年生に対し、「応用臨床実習」を分担し、実習の指導・講義を行っている。医学博士課程では、脳医科学専攻科目として「脳老化・神経病態学特論」を開設し、博士論文の研究指導を行っている。専攻共通科目として、「先端脳医科学セミナー」、「脳医科学Updateセミナー」を分担している。修士課程では、一年次前期に「病理病態学…神経系」の講義を分担している。また、著名海外研究者を招き「ニューロサイエンスセミナー」を行っている。

二、初期臨床研修

初期臨床研修では、神経疾患患者の診察手技や腰椎穿刺などを経験し、診断に至るプロセスや治療法を学ぶことはもちろん、抄読会、症例検討会、臨床病理検討会、神経筋病理検討会などで幅広く神経内科学を学べるようにしている。また、毎月一回、脳神経外科、精神科との三科合同で臨床神経セミナーを開催し、約一時間三〇分の勉強会を行っている。

毎年夏季休暇前に、金沢神経内科アカデミーとして二日間にわたり、神経内科の臨床および基礎研究に実際に触れてもらう機会を作っている。

(吉田 光宏 記)

教室だより

脳細胞遺伝子学

本講座の歴史は、昭和五十一年に開設された医学部附属神経情報研究施設第二部門（神経物性部門）に遡ります。その後の大学院部局化等の機構改革によって教室の位置付けと名称は変遷し、平成十年から大学院医学研究科分子情報系独立専攻細胞遺伝子学講座に、さらに平成十三年からは大学院医学系研究科脳医科学専攻脳細胞分子学大講座脳細胞遺伝子学研究分野に改称されて現在に至っています。

現行の教室の運営体制は、中村俊雄初代教授の後を引き継いで東田陽博教授ががん研究所薬理部門から着任した昭和六十三年二月に始まりました。現在の教員は、東田教授、橋井美奈子講師と横山の三名です。これに東田知陽博士研究員、丸朋子事務補佐員、岩崎君枝、古原和美、相川静、星居美智子の四名の技術補佐



員が加わって研究・教育活動を支えています。また、ロシアから Olga Lopatina、中国から黄健軍、劉莉と馬文婕、バングラデシユから Saharul Islam、Sarwat Aminah が来日し、博士課程大学院生として学んでいます。固有の教室員以外にも、臨床系講座の先生方、他大学の研究者が不定期に出入りし、昼夜を問わず活発な研究が行われています。

当教室の研究は、神経伝達物質・ホルモンが細胞膜の電氣的興奮性、神経伝達物質放出を制御する際の細胞内情報伝達機構の解明に向けられてきました。この基本方針は現在に至るまで一貫していますが、研究内容はここ数年の間に大きく様変わりしました。平成十六年から平成二十一年にかけて、東田教授が金沢大学二十一世紀COE (Center of Excellence) プログラムの拠点リーダーを務め、「発達・学習・記憶と障害の革新脳科学の創成」という研究課題を推進してきたため、自閉症スペクトラムに代表される社会行動障害の解明に重点を置くようになりました。主な変化は、以下の三点です。第一点は、遺伝子改変動物を用いた個体レベルの実験が多く取り入れられるようになったことです。従来は神経伝達物質受容体、イオンチャネルの遺伝子をクロニングし、神経組織由来の培養細胞株に導入した後、イオンチャネル活動、細胞内カルシウム濃度の変化などを解析する手法が中心でしたが、ノックアウトマウスを用いた行動実験が主体になってきました。現在は、種々の遺伝子のノックアウトマウスを用いながら、細胞内情報伝達物質としてのサイクリックADPリボースとその合成酵素であるCD38分子

がオキシトシンの分泌調節に果たす役割に焦点を当てて研究を行っています。近年オキシトシンは、子宮着平滑筋収縮活性以外にも、他者の記憶・認識、信頼関係の構築に必要なホルモンとしても脚光を浴びており、発達障害への治療的应用も試みられています。二〇〇七年には、CD38遺伝子のノックアウトマウスを用いた実験から、細胞膜のCD38分子がオキシトシンの神経細胞からの放出と密接に関係している、社会認識行動や養育行動の異常に関与する可能性をNature誌に報告し、国際的な注目を集めています。

第二点は、ショウジョウバエの実験系を取り入れたことです。東田教授は本学子どものこころの発達研究センターの小泉恵太准教授、米国立衛生研究所 (NIH) の Marshall Nirenberg 博士と共同研究を行い、短い二本鎖RNA (siRNA) の膨大なコレクションを一つ一つショウジョウバエの初期胚に注入し、RNA干渉による阻害効果に着目しながら神経発達に関与する遺伝子を探求しています。成果の一部は既に論文として発表され、ヒトにも存在する類似遺伝子が発達障害と関連性があるかどうか今後の関心事となっています。

第三点は、臨床検体の解析に従事するようになったことです。シナプス伝達障害が自閉症スペクトラムの要因となるという最近の考え方に沿って、国内・国外の研究施設と共同研究を行い、自閉症スペクトラム関連遺伝子を探求しています。具体的には、患者さんとその家族から供与されたDNAを対象にして、オキシトシン分泌に関与する分子の遺伝的多型を探索しています。私どもがこれまで培

養細胞で探究してきた神経伝達物質放出の機構を、実際の疾患において再検討する機会を与えられているともいえます。

教育面では、博士課程大学院生の研究指導に加えて、医科学修士課程の人体機能学および医学類学部学生の「生体の機能と統合」(第二生理学)の講義の一部を分担しています。また他の講座と同様、冬学期には三年次の学部学生三十四名を基礎配属として受け入れて、実際の研究活動を経験してもらっています。東田教授と小泉恵太准教授は、金沢大学市民公開講座「中高生のための医学生物学への招待」を毎年夏休みに開催し、二日間の実習を通じて石川県および近県の学生に医学生物学の啓発活動を行っています。

また当教室は、大学間国際交流にも積極的に参加しております。特に、全北大学校医学部(韓国全州市)とクラスノヤルスク医科大学(ロシア)とクラスノヤルスク市(ロシア)とは交流が深く、共同研究、研究者の長期・短期の滞在、合同シンポジウムの開催を通じて交流を深めています。韓国全州市は金沢市と姉妹都市協定を結んでおり、東田教授は金沢市市長の親書を携えて全州市市長を敬訪問するなど、大学間のみならず両都市間の交流にも貢献しています。

末筆になりますが、ここに紹介しました当教室の活動には、多くの学内・学外の同窓会会員の皆様のご支援を賜っております。改めてお礼を申し上げますとともに、今後とも一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

(横山 茂 記)

支部だより

沖縄支部

恒例の金沢大学医学部十全同窓会沖縄県支部総会及び懇親会は、二〇〇九年三月七日(土)にホテル日航那覇にて開催されました。会員は四十三名ですが、例年出席者は二十二、三名です。

会員は最古参でも昭和三十一年卒業から、最若年は平成十五年卒業となっており、例にもれず逆ピラミッドの高齢化集団となっておりますが、県内の医療界では中核部、中堅層を占めるに至っております。

今年も首里城下、守礼門のもとに



るホテル日航那覇の勧会の間で開催されました。当日は簡単な支部長挨拶があり、幹事より事務連絡、人事動向、新人の紹介、挨拶等がありました。

富田勝郎教授による記念講演は感銘深いものでした。金沢市内の変遷、外来病棟の完成、組織の形質転換等、美しい写真で感嘆の極みでした。

先生のお仕事の一端を拝聴させて頂きましたが、エネルギーと情熱 (passion) がピンピンと伝わって来る様な御講演でした。先生の哲学もさりながら、その圧倒的な技量とこれを支えている伝統の集大成の様な気が致しました。

脊椎癌全摘術の一枚一枚の写真は生々しくも、臨場感あふれる場面の連続でした。大動脈の拍動をbackgroundに癌を取り除く手術は、独自の空間と時間の中で、シナリオは完璧だったのか、素人には測り知れない緊張感で進行しました。傍観者であろうともその完遂を祈らずには見ていられない神業とも思えました。(二〇〇八年、高度先進医療に認定)

Lightが点き、質疑応答となりました。「あの有名な糸のこの御紹介を…」先生は内ポケットからセロファンバックを取り出し、これを開封し、こよりをつまみ出して御披露して下さいました。まるで手品師の如く、こよりをあやつりながら、その開発の経緯を御説明下さいました。

「その糸のこを発想したヒントは…」ある日自宅にお帰りになりましたまた奥様が御留守で、夕食の時間帯だったのか、そこらにある、有り合わせのチーズケーキが欲しいがナイフが見当らない。たまたま、こよりを見つけ、そのこよりで上手にチーズケーキを切り、とりあえず食

した。その瞬間、今朝の手術室の自分に戻っていた。(不遜多謝)

公式の学会発表では拝聴できない、同窓のよしみでとっておきのエピソードをプレゼントして下さいました。

当日御持参の①金沢大学概要②金沢大学附属病院概要③金沢大学附属病院診療案内はEto bookなガイドブックで、発展する母校の様子が手に取る様に分り圧巻です。

懇親会では久しぶりの会席であり、各自老いを感じる年頃になったとはいえ、学生時代に戻った様な談笑の花盛りでした。又、若い先生方の参加もあり、今年は新鮮な同窓会となりました。

(大浦 孝 記)

当日の出席者 (卒業年度)

山城 則亮 (昭和三十一年卒業)
金城 国昭 (昭和三十一年卒業)
久田友一郎 (昭和四十三年卒業)
大城 功也 (昭和四十四年卒業)
国吉 光雄 (昭和四十六年卒業)
大城 康彦 (昭和四十八年卒業)
安里 公 (昭和四十八年卒業)
上原 茂弘 (昭和四十九年卒業)
上里 博光 (昭和五十一年卒業)
崎山 慧史 (昭和五十三年卒業)
伊波 久光 (昭和五十三年卒業)
外間 政利 (昭和五十三年卒業)
長田 信洋 (昭和五十三年卒業)
堀川 恭偉 (昭和五十六年卒業)
知念 弘 (昭和五十七年卒業)
具志堅 功 (昭和五十八年卒業)
浜端 宏英 (昭和六十年卒業)
奥村耕一郎 (平成二年卒業)
上原 健 (上原Jr) (平成十五年卒業)

岐阜支部

四月十九日、久しぶりの十全同窓会岐阜支部会が長良川河畔の都ホテルで開催されました。東濃、西濃、中濃、岐阜、飛騨、各地区から情報をもたらして頂き十二人の先生の参加で開かれました。

会は自己紹介と言うか、顔馴染みの先生が多く近況報告の趣で始まりました。

数年の間には色々変化もありましたが、ご高齢の諸先生も若い先生に負けない程の顔の色艶で、即座に打ち解けた雰囲気となり学生気分に戻り、恩師の話、学生時代の思い出話などに花が咲きました。

又、研修医制度に端を発した医師不足の問題、日常診療上の問題等での情報交換、助言のやり取り等もあり和気藹々



中にも有意義な会になりました。

又、金沢大学の三学域、十六学類への編成替えに話が及び、今後東海地区の隣接する愛知、三重の同窓会とも連絡を密にする必要があるか等の話も出て、次回は十全同窓会本部からの出席をお願いしようとの事になり、記念写真撮って次回での再会を約して散会となりました。

写真前列左より

坪口 昇 昭和二十五年卒業
松井 永二 昭和十九年卒業
宮川 勝明 昭和二十五年卒業
河田 幸道 昭和三十五年卒業
米倉 幸人 昭和三十九年卒業
大西 弘生 昭和五十一年卒業

写真後列左より

高橋 健 昭和五十七年卒業
徳永 周二 昭和五十四年卒業
吉尾 豪 昭和四十五年卒業
渡辺 幸夫 昭和五十六年卒業
国枝 克行 昭和五十三年卒業
井奈波良一 昭和五十五年卒業
竹村 博文 昭和六十年卒業

(十全同窓会岐阜支部 米倉 幸人 記)

愛知支部

平成二十一年六月六日(土) 十六時三十分より名鉄グランドホテル北京宮廷料理「涵梅舫」にて、第二十三回金沢大学医学部十全同窓会 愛知県支部総会が開催されました(三河地区担当)。金沢より同窓会理事長の古川侃先生をお迎え

して三十五名にお集まり頂きました。

副支部長・三嶋勉先生(昭和三十九年卒業)に「開会のことは」を頂きました。次に、この一年に逝去されました佐久間廣先生(昭和二十年卒業)、林公健先生(昭和二十五年卒業)、尾山修先生(昭和三十七年卒業)のご冥福をお祈りし、黙祷を捧げました。

「支部長あいさつ」 中村暁先生(昭和三十八年卒業)より、昨秋よりの世界同時不況などの社会情勢や、社会問題化した医療崩壊、医師不足など現在の医療を取り巻く情勢についての所感が述べられました。症例報告の準備もされていたようでしたが、残念ながら時間の都合で延期となりました。



篠田雅幸先生(昭和五十一年卒業)より会計報告があり、横田徳久先生(昭和三十五年卒業)、大原教知可先生(昭和三十一年卒業)の監査を受け、承認されました。寄付金により健全に運営されており、事務局の篠田先生ご夫妻と幹事の先生方にはいつもお世話になっております。(感謝)

尾山淳先生(昭和四十三年卒業)より、「金沢大学全学同窓会連絡協議会について」の報告がありました。

古川先生より「新金沢大学付属病院完成 新外来診療棟竣工」と題して、金沢大学医学部の近況報告がありました。新装となった病院をスライドで紹介していただきました。病院一階の「ホスピタルプロムナード」は吹き抜けて瓦屋根が取り入れられており、近代的な中に「和」の雰囲気が出るとして表現されていました。私の学生時代の病院とは隔世の感があります。

今年の講演は、中村支部長の紹介で、気象予報士でCBCテレビ『イッポウ』気象キャスターの岩名美樹様をお迎えし、「天気予報の裏話」を伺いました。日本は四季の変化があり、「rain」と違い「雨」にもさまざまな表現があり、日々季節の話題を我々に提供してくださる苦労の一端を窺い知ることができました。地球温暖化についての話題もありました。予報に対してのクレームもあるそうで、人体と同様に、気象も予測しきれないことが、一般の方には理解されないのだと感じました。

春日井達造先生(昭和二十年卒業)の乾杯のあいさつで懇親会が始まりました。

岐阜県支部長の米倉幸人先生(昭和三十一年卒業)、開業一年目の小畑直子先生(平成二年卒業)、初参加の西脇太記朗先生(平成七年卒業)にあいさつをして頂きました。

近藤俊樹先生(平成八年卒業)の万歳三唱と吉尾豪先生(昭和四十五年卒業)の「閉会のことは」で閉会となりました。また次回も諸先生方の参加をお待ち申し上げております。

(岩瀬 克敏 記)

七尾鹿島支部

金沢大学医学部十全同窓会七尾鹿島支部の平成二十一年度総会は六月二十六日午後六時三十分より七尾市府中町番伊で



開されました。会員七十五名中十六名が参加しました。総会は刀瀬支部長の挨拶で始まり、会計報告、監査報告、平成二十一年度総会終了後からの支部役員選出が行われました。また、佐原新支部長より、同窓会支部を能登地区でまとめるより多くの同窓生の親睦をはかるうとの提案がなされました。他地区の支部との連携が必要なことでもあり、この議題については臨時役員会が後日開催されることとなりました。

その後、十全同窓会理事、金沢大学副学長、病院担当理事古川仰教授をお招きし、「金沢大学ならびに大学付属病院の近況」の演題で講演をしていただきました。新外来棟が完成した付属病院の写真や今後の整備計画、遠藤客員教授のラスカー賞受賞、放射線科松井教授の文部科学大臣表彰科学技術賞受賞など大学の現在とこれからの展望についてお話していただきました。また法人組織である先進医療センターの設立に内容が至っては卒業年次のはやい会員らから「今浦島になっちゃった。」との声が生々しくでした。

記念撮影の後、古川教授にもご参加いただき、懇親会が開かれました。刀瀬支部長の挨拶、乾杯のご発声があり、約二時間にわたり、にぎやかに歓談いたしました。顔見知りの会員同士の近況報告やお互い紹介状の名前のみの認識でしかなかった先輩会員と新会員との顔合わせなど、普段の診療とは違った楽しくも有意義な時間となりました。

(公立能登総合病院 富田 剛治 記)

クラス会

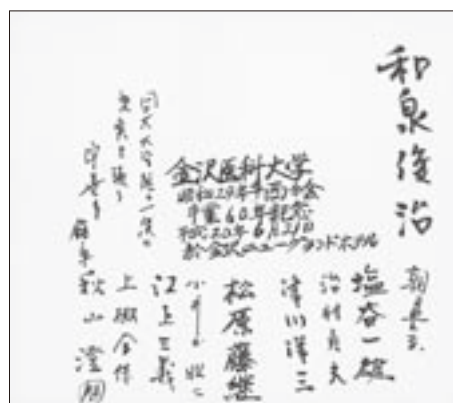
西々会(卒業六十年記念の会)

我我は昭和二十四年卒業の旧制金沢医科大学第二十四回生で、二四が重なるのに因んでクラス会名を西々会(チャーシャ会)という。

平成十一年の卒業五十周年記念の会以後会っておらず、昨年春クラス会を開催しないかという声が二、三あり、近くで開催している同期の「新雪」主宰の歌人津川洋三君とバスで一緒になったので話したら、しようということになり彼がホテルに交渉してくれた。卒業六十年目記念の会として日時・場所を決定し、彼との連名で開催通知を発送した。十五名から出席の返事を受けたが、開催日近くになり四名が体調不良等で欠席となり、最終的に出席者は卒業時の約一割の十一名になった。現役として医業を続けている者ばかりだった。

卒業六十年記念の会は、平成二十年六月二十一日(土)午後五時から金沢ニューグランドホテル「白扇」の間で開催された。ロビーで待っていると懐かしい級友が次々と到着し、卒業以来はじめての者もあった。出席者は後記の十一名と令夫人一名令嬢二名の計十四名であった。記念撮影を済ませ部室に移り、五十音順に向い合って着席した。最初に世話人の津川君が学生時代の印象深い思い出と歓迎を込めた開会挨拶をし、次に当時の教授で最もご長命で近年百二歳で逝去された精神科の秋元波留夫先生はじめ他界された恩師と級友を偲んで黙祷を捧げた。大

阪から参加した和泉俊治君の発声で乾杯し開宴となった。料理はホテルの薦めもあり日本料理で金沢ならではのおいしい物をいろいろ出していただき好評であった。少しアルコールの入ったところで、先ず私が欠席者からの近況をお伝えし、秋山澄君から順次、学生時代の思い出、卒業後の足跡、趣味、近況などを話していただいた。終戦直前直後の最も苦しい時代に学生生活を経験したので、当地出身の私には気づかなかった学生時代の苦労話など聞き感慨深いものがありました。最後に、同席された精神科専門医である秋山君の次女典子さんをお願いして、今後の我々のメンタルヘルスについ



てアドバイスをいただき有益であった。予定時刻も過ぎたので、皆の今後の健勝、多幸を祈念し、金沢在住の上棚金保君の発声で万歳三唱し中締めとした。二次会は同ホテル十二階のラウンジで遅くまでゆつくり歓談した。参加できなかった者も含め級友諸兄の今後の人生のよからんことを心からお祈りする。

我我もいささかながらも懸命に医学医療の一時代の一端を担ってきたと自負しているが、それも終ろうとしている。十全同窓会の後輩就中若い諸君のご活躍を期待し祈っています。

出席者(敬称略)

秋山澄、夫人鈴子、次女典子、三女千晶、朝日豊吉、和泉俊治、浮田鎮、上棚金保、江上三義、小井土昭二、塩谷一雄、治村貞夫、津川洋三、松原藤継

(松原 藤継 記)

三六会

昭和三十六年卒業の同窓会三六会が本年は福井県の当番となり、去る七月十九日あわら市芦原温泉「つるや」旅館で開催された。幹事は福井県在住の荒川弥二郎、小林清二、齋藤榮宏（敬称略）の三名である。出席者は六組の夫人同伴を含め二十六名であった。出席者の名前は以下の通り。（但し御夫人の方の名前は誤りをさけるため省略する）浅妻茂美、荒川弥二郎、井田時男、伊藤（旧姓槍田）俊夫、白井明夫、大屋他喜雄、小林清二、小林勉、齋藤榮宏、佐原吉博、寺島弘、中文彦、中川正明、西野広、星野元昭、向平淳、山本鉄郎、吉村卓也、力丸修、以上の各氏である。

十九日の午前中、地元の芦原CCで川夫妻、荒川、齋藤の四名でゴルフを楽しむ予定であったが、ハーフを終り小休止中から雨が降り始め徐々に激しくなり四ホールを残して中止の止むもなきに至ったのは残念であった。

記念撮影後六時間から井田君の発声で乾杯、開宴、芸奴五人も精一杯の仕事振りを見せてくれ大いに語り、飲んだ。清算書を見ると皆さん方の酒量はまだ、仲々のものである。翌朝、朝食後解散、希望者十人足らずで、芦原町内にある魯迅記念館、藤野厳九郎先生旧宅を見学した。

旧芦原町は藤野厳九郎先生の出生地であり、魯迅（周樹人）の「藤野先生」という小篇があることを機縁として昭和五十三年から、中国、紹興市（魯迅出生地）と姉妹都市となり、毎年交流訪問を続け、少しずつ集まった魯迅と藤野先生に関する資料を展示する記念館を開設している。

ている。

平成二十二年度は名古屋にて白井、星野両氏のお世話で三六会を開催し、卒業後満五十年の記念同窓会は金沢市で開く事となっている。（齋藤 榮広 記）

三九会

平成二十一年度標記同窓会は五月十六日、KKR金沢ホテルで行われた。

会員三十二人と同伴夫人十二名が出席した。夫々が卒業四十五年、七十歳の現状を話し合い楽しい一夜であった。

然しながら昭和三十九年（一九六四）の卒業時クラスメートは七十七名であったが、すでに十余名が逝去されており、



生死測りたい命運を改めて認識する日もあった。

翌日はゴルフと金沢市内散策を任意選択して、更なる交流を期したが、あいにくの雨天にてゴルフ参加者は五名に止まり残念であった。

散策組は九名で石川四高記念文化交流

医師会コーナー

平成二十一年度 医薬保健学域医学類 特別講義開講を終えて

石川県医師会理事 小川 純

石川県医師会は、昨年に引き続き、今年度入学の医学科一年生に対し九十分、五回の講義を行った。昨年の講義は初めての試みであったが、五回の講義を終えた時点で学生からの印象と要望をアンケートで答えてもらった。若い医学生にこれから医学を学ぶ心構え、あるいは医師になる自覚を持つてもらうと始まった講義であった。学生にとってはおそろく臨床現場の先輩医師から話を聞くことは初めての経験であると思う。これまでの豊富な経験談を聞くことができてよかったという意見が多く聞かれ、話をする側としてもとうれしく思った。さて、そのアンケート結果であるが、要望として女性医師の話、僻地医療を経験した医師の声、研修医の声が聞きたいという意見があった。今年度はこの学生の希望を実現しようと女性医師、県立中央病

館と石川近代文学館で先輩達の幾多の事跡に感銘すると共に、元理学部の教室で理数系を学んだ五十余年の昔を懐かしんだ。

ついで金沢市二十一世紀美術館を見学したが、偶々展示は全て抽象的で美術に疎い私には全く理解できず、この企画は反省している。（浅妻 茂章 記）

院の先生方に協力していただき講義に参加していただいた。

第一回は「日本の医療制度、世界の医療制度」で小森石川県医師会会長、多賀千之先生、第二回は「各診療科、現場からの声」と題し、内科（近藤邦夫先生、洞庭賢一先生）、外科（大平政樹先生）、小児科（久保 実先生）、精神科（前田義樹先生）の経験を学生の質問に答えていただく対話形式で行った。第三回は「女性医師」を沼田直子先生に、「勤務医、研修医」を泉中の新田俊一先生、研修医の井上大輔先生、八野田 愛先生にお願いした。第四回は「救急医療」を私が、「過疎地域医療」を泉中の山本大輔先生、吉田尚弘先生に、第五回は「日本医師会・県医師会・市医師会」を竹田康男先生と私が担当した。

最後にまた学生にアンケートをお願いした。学生は興味を持って聞いてくれたようで「もっと現場の話が聞きたい」「もっと参加型の講義が聞きたい」「もっと女性医師の話」「もっと研修医の話」などの意見が相次ぎ、好評であった。医師会活動に対しても少し理解をいただけたようであれしく思っている。

医学部百五十年史のための覚え書【26】

医学得業士

卒業生の称号(1)

赤祖父 一知

明治初期の金沢医学校時代の卒業生は、内務省医師免許を得るために、医術開業試験に合格することが必要とされていた。明治十五年(一八八二)公布の医学校通則に基づき明治十七年(一八八四)石川県甲種医学校が開校し、試験を要せず卒業証書の誦認により内務省医術開業免状が授与されることになった。しかし、卒業生に特に称号を授与されることはなかった。

明治十九年(一八八六)中学校令の発布によって、高等中学校が当初大学予科というよりも帝国大学に準ずる専門教育機関の構想をもって設立され、千葉、仙台、岡山、金沢、長崎に官立高等中学校医学部が附設された。本校は明治二十一年(一八八八)四月に第四高等中学校医学部として発足した。府県立の甲種医学校のうち、官立以外では京都、大阪、愛知の三校のみが公立医学校として存続した。

明治二十三年(一八九〇)施行の高等中学校官制においても設置当初の構想がなお維持されていたが、明治二十七年(一八九四)公布の高等学校令によって「高等学校ハ専門学科ヲ教授スル所トス但シ帝国大学ニ入学スル者ノ為メ予科ヲ設クルコトヲ得」と定められ、医学部は

専門学校的教育機関として制度化された。翌明治二十八年(一八九五)には、卒業生に医学得業士の称号が認許されることになった。

明治二十七年第四高等学校医学部と改称され、同年以前に係る高等中学校医学部卒業生に対しては、明治二十八年五月発布の高等学校医学部卒業試験及卒業証書規定第十三條第二項により医学得業士の称号を用いることが認可された。

今回「十全会雑誌」を中心に第四高等中学医学部卒業生の医学得業士称号認許者について調査したところ、表1に示すごとく、明治二十六年までの全卒業生一三〇名中八〇名の氏名を確認することができた。その認許書は現在本学資料室に一通収蔵されている。その後明治三十四年(一九〇二)に至り、勅令第二十四号で官立高等学校医学部は医学専門学校として独立し、第四高等学校医学部は金沢医学専門学校となった。しかし卒業生の称号は医学得業士のままであった。

表2は明治三十五年(一九〇二)の免許取得資格別による医師の構成を示すものである。卒業資格で免状を得られた正規の医学校出身者は、全体の約二〇%で、当時の大学卒業生は別課を含めた東京大学・帝国大学卒業生のみで全体の四、四%

であった。そのうち本科卒業の医学士は極めて少なく全体の二%位と考えられ、官立医学校卒業の医学得業士は七・六%、無称号の公立医学校卒業生は七・八%であった。当時は従来開業医が四十四・三%、開業試験合格者が三十一・七%と医師の大部分を占めていたが、医学得業士は主に地域ブロック内において、指導的立場を得て、地方病院、医師会で活躍することとなった。

学士のドクトルに対し、得業士はカンジダート(cand.med.)に相当するものと考えられるが、称号の有無は医師の階層的構造を生み、その序列化を促進した。なお公立医学校卒業生に医学得業士の称号が認許されたのは明治三十六年(一九〇三)の医学専門学校令発布後であった。(以下・次号)

表 1 第四高等中学校医学部卒業・医学得業士認許者

明治22年	・赤祖父 龍太郎 ・川手 正巳 ・鈴木 節齋 ・三崎 玉雲 (甲)	・有川 恒二 ・河崎 秀拙 ・竹内 達男 (甲)	・生野 恒吉 ・北田 常周 ・津田 吉造 (甲)	・瓜生 保之夫 ・北野 恒吉 ・津田 常周 (甲)	・小栗 熊次郎 ・齋藤 正雄 ・富田 繁 (甲)
明治23年	・阿部 馨雪 ・駒形 重光 ・篠尾 明 ・山本 晋 (乙七部)	・池田 龜祐 ・坂井 迪太郎 ・田代 義一 ・吉田 義一	・小川 善平 ・佐川 忠茂 ・木部 喜八郎 ・渡部 喜八郎	・善忠 忠茂 ・佐川 忠茂 ・木部 喜八郎 ・渡部 喜八郎	・黒田 政太郎 ・佐藤 盛直 ・宮内 順吉郎 ・渡邊 順吉郎
明治24年4月	・池田 昭 ・清水 来吉 ・蓮村 外男 ・山田 孝太郎 (平)	・勝木 直吉 ・池田 和太郎 ・廣野 誠一郎 ・米村 吉太郎 (吉三郎)	・川西 初太郎 ・納富 貫男 ・梁 達一 ・輪 達一 (松村隆蔵)	・河合 久太郎 ・濱田 芳太郎 ・山崎 秋津磨 ・山崎 秋津磨	
明治24年12月	・井口 泰作 ・樫田 仙次郎 ・坂野 長三郎 ・正見 伊三郎	・漆山 順治 ・黒川 由己 ・澤賢 吉 ・横山 杉	・大月 保三 ・窪田 房吉 ・關根 倉治 ・吉川 新八	・岡本 京太郎 ・澤田 定信 ・高柳 元六郎 ・高柳 元六郎	
明治25年	・天田 峯五郎 ・建入 久治郎 ・松島 丈俊 (永井)	・井田 善敬 ・中川 啓次 ・松田 準 (松田)	・加藤 一郎 ・藤井 順三 ・丸山 耕平 (藤井)	・河村 賢太郎 ・藤井 秀 ・藤井 秀	
明治26年	・上野 貞吉 ・野崎 三郎 (占野)	・加須屋 武留 ・松森 佐一 ・森岡 市太郎 (三郎)	・木村 辰次郎 ・森岡 市太郎 ・吉田 和三郎	・島村 豊次郎 ・吉田 和三郎	

十全会雑誌第1号(明治29年11月25日)、同第2号(明治30年3月10日)、東京医事新誌第1574号(明治41年7月11日)より作成。
姓名の表記は「医学部生徒一覧」(資料室所蔵)によった。

表 2 医師の出身別構成(明治35年(1902))

免許取得資格		人数	%
卒業	大学 ¹⁾	1,386	4.4
	高等学校 ²⁾	2,369	7.6
	府県立医学校 ³⁾	2,452	7.8
	外国医学校	67	0.2
試験	試験合格 ⁴⁾	9,926	31.7
経歴	奉職履歴	833	2.7
	従来開業	13,871	44.3
	限地許可	386	1.3
		31,290	100

「教育ノ効果ニ関スル取調」文部省 明治37年(1904)より作成

- 1) 東京大学・帝国大学本科卒業生(855人)と同別課卒業生(1,047人)を含む
2) 官立学校医学部・同医学専門学校卒業生
3) 甲種医学校・公立医学校卒業生
4) 旧試験合格者(2,256・7.2%)と新試験合格者(7,670人・24.5%)の計

学生コーナー

ダンテ「神曲」を読んで

医学科四年 北崎 佑樹

「次に、君に問う。人前で堂々と医学を選んだ理由を言えるか？万一「将来、経済的に社会的に恵まれそう」以外の本音の理由が想起できないなら、君はダンテの「神曲」を読破せねばならない。それが出来ないなら早々に転学すべきである。」

（医学を選んだ君に問う）元金沢大学医学部附属病院院長 河崎一夫先生 より一部抜粋）

高校時、私は朝日新聞に掲載されたこの文章に出会いました。その当時は「自分は金銭や社会的地位には興味ないね」と、読み流していたのですが、そんな自分も既に医学部四年生。医師という夢が現実へと近づき、喜びよりも将来への不安、恐怖を感じ始めました。不安のあまり、配属先はラクで収入もイイ場所（あるはずないのですが…）とまで考え出す始末です。

大学生活を振り返り、昔思い描いた「理想の医学生」、「理想の自分」から現在の自分が完全にかけ離れており、全く自分に誇りを持ってないことが将来への不安を覚えた要因かもしれません。

そんな折、自室にて上記の文章「医学を選んだ君に問う」に目が留まりました。高校時代は「そりや医学生だから当然」と感じていた文章が今は胸に突き刺さります。

「よく学び、よく遊び」は許されない。医学生は「よく学び、よく遊び」しかない』『医師の知識不足は許されない』など全文にわたり重みがあります。

しかし、ひとつ気になる点がありました。冒頭部にあるように、なぜ「ダンテの「神曲」を読破」すべきなのか？

私自身、読書は趣味であり、今夏「神曲」を読破してみようと考え、即座に「神曲」（河出文庫 訳 平川祐弘氏）を購入しました。

説明しますと「神曲」は地獄篇・煉獄篇・天国篇の三部構成であり、主人公はダンテ自身です。内容を以下に端的に述べます。

「最愛の人を亡くしたダンテが悲嘆していると、突如周囲が暗い森となり、ダンテは途方にくれる。すると前より詩人が現れ「ここは死者の世界、あなたは生き身のまま迷い込んだ。私はあなたを案内し、現世に戻る手助けをしよう」と述べる。こうしてダンテは死者の世界で地獄、煉獄、そして愛する人の待つ天国を旅し、様々な亡者と出会い、人間の本质とは、罪とは、愛とは何かについて考えていく…」

そしてダンテは天国から現実世界に戻り、物語は幕を閉じるのですが、読み終えても私自身の読解力、教養不足により、河崎一夫先生が医学生に求めたであろう「読破」のレベルに辿り着けたとは全く思えません。内容理解すら非常に困難でした。

しかし、地獄や、煉獄で亡者たちが懺悔している罪（強欲、出世欲、嫉妬、裏切り、怠惰など現在の私自身がもはや罪とすら感じていないもの）により惨たらしく罰

を受けている描写を読むと、現在の自分のあり方を再考せざるをえません。

さらにこの「神曲」にて私がとりわけ自身に対し自問した部分があり、内容は、「自然からの愛は決して誤らないが、意識からの愛は目的が不純であるとか、力に過不足があると誤ることがある。意識からの愛が原初の善（神）、または第二の善（物質）の中で分限を弁えて向かえば罪のある喜びにはならない。」

「神曲」の中では「愛」とは魂であり意思であり神、つまり初動の源とされています。人間における自然からの愛とは、生物としての人間の本質的な喜び、幸福を満たす意思であり、意識からの愛とは目的（物質）へ向かう意思と考えられます。

ならば現在の自分はどうか。経済的、社会的な（物質の）喜びを自分の本質的な幸福と考えるあまり、違和感は覚えなかっただろうか。

元病院長 河崎一夫先生曰く
『心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何事かを成し遂げたと思えるときののだ』この文章が自分への問いの答えとなりました。

何かを得るために努力するのではなく、損得勘定抜きで他者のため尽力する「理想の自分」でありたい。これが私自身の欲びであり幸福なのではないかと感じました。医師として日々患者さんのため全力が尽くせる自分がいる。これ以上の充実はないように思います。

大それたことを述べましたが、まずは授業に遅刻しない、講義をしつかりと聴く。正直ここから始めなくてはなりません。

ん。「理想の自分」に近づき、誇りが持てるよう精進していくつもりです。

最後になりましたが、このような機会を設けて頂いた十全同窓会の担当の方々、そしてこの拙い文章をお読み頂いた全ての方に感謝し、終わりたいと思います。

白山診療班OB（正班員）
に夏山登山をお願いする白山診療班顧問 山口 成良
（昭和二十七年卒業）

私は今年（二〇〇九年）満八十歳になりましたが、夏には例年のごとく白山に登り、室堂センター内の白山診療所で診療活動に従事しました。「くろゆり荘」で転倒した登山者を往診したり、食堂で倒れてテーブルで頭部裂傷した登山者の処置をしたり、真夜中に不眠を訴えて来室した登山者に投薬したりしました。医学部学生の熱心な協力のもと、何とか診療活動を続けることが出来て、楽しい一泊二日の夏山でした。

ただ、残念なのは、診療所は、おおむね土・日・月位しか毎週開いておらず、あとは先生方の登山が少ないので休診となっています。以前は毎日診療していたのに比べて気がかりです。室堂内の白山診療所は以前と違って小奇麗で、診療室に接して寝室もあります。どうか多くの白山診療班のOBの先生が夏山に登山されて、学生とともに一人でも多くの患者さんを診ていただくことを切にお願い致します。

平成二十一年十全同窓会

名簿刊行いよいよ間近

編集委員会では、各卒業年度からの調査担当者の協力を中心とし、複数の方に住所変更の校正作業をお願いし、遺漏のないように努力しています。何分多数、多岐に亘る作業ですのでご協力の程宜しくお願い致します。「名簿掲載事項確認届」のご提出がまだの方は最終締め切り十月二十日(火)到着分までが今回の名簿改訂作業に反映されます。今一度ご確認くださいませようよろしくお願い申し上げます。

同窓会のホームページをご利用ください

URL: <http://www.m.kanazawa-u.ac.jp/jyuzen.html>

なお、改訂版の発送は十二月初旬を予定致しております。

十全同窓会名簿編集委員長 古川 俣



第三回ホームカミングデー 旧城内や宝町キャンパスも御案内

三回目となる今年は、左記プログラムにより七月末に案内状を発送しました。

記

〇日程 十月三十一日(土)

十一時 受付

軽食交流会 軽食を囲んで旧友と歓談

十二時 開会 ■校歌斉唱 ■学長挨拶

十二時三十分 学長表彰

十二時四十五分 記念講演

十三時四十五分 角間キャンパス出発

(大型バス)

十四時十五分 小立野(工学部跡)

十四時四十五分 宝町キャンパス

十五時十五分 旧城内キャンパス

写真展 よみがえる
城内キャンパス

金沢城・兼六園散策

城内で流れ解散

十七時

(十月三十一〜十一月一日の期間には、後輩たちが今年も医学展を開催予定)

〇会場 角間キャンパス自然科学棟

〇今年も七十五歳以上の卒業生と、卒

後五十、四十五、四十、三十、二十、十

年の卒業生に案内状を発送しました

が、卒業生なら誰でも参加できます

ので、「卒後〇〇周年学年会」など

を積極的に企画して御参集ください。

〇お問合せ先

金沢大学学友支援室(西谷公作)

電話 〇七六―二六四―五〇八一

編集後記

街のそここに金木犀が香る季節になりました。私にとって金木犀は特に学生の頃の楽しい記憶を呼び覚ますのですが、最近の高校生は「トイレの匂いや」と色気のないことを云いながら通り過ぎて行きます。

第四十五回衆議院選挙で政権交代を果たした鳩山由紀夫総理と新内閣が動き出しました。国連での二酸化炭素二十五％削減目標公表、建設中の国内ダムの見直しなど環境政策が眼を引きますが、医師不足にどのような対策を打ち出すかが試金石です。医学部定員五十％増しという民主党のマニフェストは、それを支える教員数・教育設備の裏付けがなければ、教育現場の負担を増すだけに終わります。私の専門分野(麻酔科)についても、民主党は医師以外の職種に医科麻酔を解禁するという政策を検討したことがあり、今後民主党が打ち出して来る医療政策に注目しています。

これまで十全同窓会会報に医学部学生の生の声が掲載されることは、ほとんどなかったように思います。十全同窓会の将来を担う若い世代の声を会報に反映する目的で、医学部四年生の有志に、学生として思うことや教員に対する要望など、内容を限定せず自由に書いて貰い掲載することにしました。口切り役を引き受けてくれた北崎君は相当緊張したようですが、高尚な書き出しから最後には学生らしい日々の努力目標にまとめてくれました。号を重ねるにつれてさまざまな意見が学生から出てくると思います。同窓会諸兄姉には彼らにご自身の学生時代を重ねて、ご海容下さるようお願い申し上げます。

(同窓会会報編集長

麻酔・蘇生学 山本 健 記)